關西大學
學生新聞
編輯兼發行人　竹下文雄
印刷人
發行所　關西大學學生新聞部
大阪市東淀川區

教養の問題

▽……田上慶太郎

一

教養を　を問題とする時人々は一般に人格と云ふものを想起するのが恒なのである。教養が人格的なものであるとしても、一般的には人格とは道德上のカテゴリーに屬するものとして見られ、而もこの人格の論理的價値判斷に基づく評價が人格の內容をなす如く考へられ、推しては人格決定の基準にまでされるのが常識なのである。この意味に考へると教養も道德上の問題として取扱はれなければならぬ。しかしながら道德上の事柄は窮極的には●●ことの善惡が根本問題であるが故に教養も必然的に善惡の問題を離れて考へられなくなるのである。

禮儀作法及びその風來と云はれる所の日常な人間の生活關係に於ける行爲はそれ自身としては教養の何たるかを理解せしめるものではなく、それは唯人間の相互的な關係を保つべき社會的秩序を紊さないためのものたるに過ぎぬのである。しかのみならず、これらの禮儀作法及び風來と云はるべきものとても、現實に於いては特定な社會關係を構成してゐる身分的及び階級的諸關係によつて制約され規定されてゐることを知るのである。然しこれらの事柄は教養の有無に關する日常的な而も最も卑近な現象にすぎぬのであつて、この事から教養の何たるかを知ることは不可能であらう。なほ教養の有無が論ぜられる場合に於いてもその前提として教養そのものが何たるかを既に知られてゐなければならぬ。人間が現實に彼の生活過程を不斷に發展維持さしてゆくためには、そこに與へられたものとしての

特定の　社會の中に適應的に行爲されなければならず、謂はゞこの環境への適應的行爲が人間の日常的に營まれる現象としての行爲なのである。而もこの日常的な行爲がその環境から受ける所のものは、その特定な即ち歷史的に限定されてゐる所の、そしてそれ自體としてその內部組織と機構とに依つて構成されてゐる所の社會から、當該社會の發展維持のための慣習的な、或は法律的な規範が與へられ、人間はこれらの規範に基づく明文●不文的な制度の中に生活してゆくのである。制度とはとりもなほさずその社會の社會的秩序の組織的機構的表現に外ならないそしてこの社會的秩序を紊さぬことが一般に云はれる善なのであり、それを紊すことが惡なのであると見なされるのである。

この樣な考へ方が如何に卑俗なものであつたにしても一應は唯表面的な意味に於いて認められなければならぬであらう。けれども前述の如くその事から決して教養についてそれが何であるかは理解せられない。

大學の最高任務として我々はそれが研究、教育、教養の三者であることを知つてゐる。こゝに於いて教養とは大學がその學生に施す所の機能的內容の如くに、そして大學のかゝる役割が教養を生むかの樣に考へられるが、矢張りこゝにも教養そのものについては解決が與へられないのである。大學の本來の固有の任務が何であるにしても、大學そのものが社會の教化機關たる性格を有つてゐる限り、その教化の內容の如何に依つてその任務の一たる、教養も異なつたものたらざるを得ないであらう。而も

大學の　任務としての教養は普通に云ふ所の教養とは幾分か異なつたものの如く想はれるのである。或る意味に於いて教養なる概念は限界を有たない樣にも考へられ、其限界を有たない所が教養の何たるかを思はしめるものがあるとも云へないではないが、それは眞實に教養の概念規定を定義的に與へんとする形式的な考へ方の自己矛盾の現れであるのではないか。

私は教養の本質、その實質的內容を文化的意識或は精神であると思ふのである。この文化的意識或は精神と云はれるものは恒にその基礎に確實なる且つ正しき認識が存在しなければならず、この認識を離れた文化的意識なり精神なりは考へられないのである。即ち教養の問題は善惡の問題ではなくして認識の問題にまで深められるべきであると思はれる。道德はこの認識の有無につき、又はその認識が現存の社會的秩序との均衡統一矛盾對立に對する批判の一面にすぎぬのであつて、且又ある認識が現實的であらんとする、時に於いてその認識がその認識を生んだ社會の社會的秩序と抵觸する場合その認識がたとひ道德上惡であるとしても認識そのものゝ正しさには聊かも觸れるものでないことは自明であらう、何故なら認識の問題は認識論的領域のものであり倫理學的領域のものではないから、と云つても私は此兩者を機械的に分離、併合したりしようとするものではないが、又、兩者は混同さるべきものでもないであらう。

二

文化的　意識と云つてもその內容をなすものは種々あるのだし、その意味に於いてある特定な對象をその內容とする文化的意識なるものが文化的意識の全體を表現するものではない故に、私はこれらの諸々の文化的意識の根底に横たはつてゐる認識について考へて見ようと思ふのである。ところが文化的意識も人類の現實的な永き生活過程から生れたものであつて、更にこの被造物としての文化的意識は逆に人間の生活に反作用を及ぼしつゝ交互的作用をなすものである事は周知であう。謂はば人間の生產物である文化—推してはその基礎の文化的意識も又人間の生產物の一つ—は人間の生產的行爲によつて恒に古きものから新しきものへと創造されてゆくのである。そしてこの事は必然に教養も歷史的に遺られたもの又創られつゝある所のものと觀られるべき事を要求する。認識の問題とても歷史的に人間がその生活過程の中から生み、發展さしてゆく事には變りはない。問題は文化的意識が認識の發展に應じてそれ自身も發展してゆくことなのである。物質文明と云はれる場合に於いてもそれが人間の認識の發展によるものであることは今更の事でもないが要はこの認識をする人間即ち認識者が如何なるものであるかが考察されなければならぬのである。社會關係の內容をなすものが階級であれば認識者も具體的には恒にこの階級的性質を有ち、それは推しては認識の世界觀上に迄發展するものである。階級的世界觀、階級的文化意識等も考へられるであらう。或ひは世界的とか民族的と云ふことも考へられることは明白なことであるが、これと同時にその

階級的　性質をも忘れられるべきではないと思ふ。教養が歷史的に發展增進せしめられてゆくものたる限り又その上に社會的には民族的に階級的性質を有つ限り、その限りに於いて教養は單なる教養と云ふものに非ずして、より根源的に民族的教養、階級的教養なのである。人間が人間としての教養とか、現存社會秩序への順應するものとしての人格的な教養と云はれるものは觀念的幻想であつても具體的なものたり得ない事は明らかなことである。何故なら社會が階級社會であるならば必然に教養も相對立する階級教養として現はれざるを得ないし、而もこの事は現存社會秩序に對して否定的な態度をもつに至る教養もあるからである。然し以上の事は畢竟するに、教養の基礎たる認識のより根源的に認識者の社會に於ける、客觀的地位に由來することである。

こゝに於いて教養の問題は認識の問題と同時に社會の社會關係の問題にまで發展伸長されなければならない。民族的教養と云はれるものと雖もそれは唯それの世界に對して云はれるものであるが、これとても現實の人間のもつ生活諸關係の異質的差別性—即ち自然的條件とそれと人間の生產に於ける條件。生產的交易的諸關係と地理的氣候的諸關係との辯證法的關係—に基づいて歷史的に形成されたるものたる限り、それもその歷史性を逸脫することは出來ぬし、現實にはこの民族の內部的構成要素として階級が存在する事は否定すべくもないであらう。教養の問題はその本質である文化的精神の問題と共に又

現實に　それが日常的な行爲にまで表現されることが必然であると同時に、この表現されたる行爲をも實踐的な意味に於いて問題としなければならず、かゝるが故に日常的な卑俗と云はれることも一應その考慮に入れられるべきものとなるのである。

最後に學生の教養について見るに、學生が社會の生產的部面より一應分離され、且又學生本來の目的が知能の發達、技術の習得、謂はゞ學生が學生としてある爲の觀が彼の知能性をもつことであるならば—そうでなければならぬ—この知能性を發展せしめることが學生の教養を有つ所以となるのではなからうか。而も教養が認識を離れてないとすれば尙更のことであらう。だが、こゝに問題として殘るのは學生の教養と階級的教養の關係である。

學生はある意味に於いて直接には階級を構成するものでなく、それ故に階級性も有たないとも云へる。この事は事實であるが、若し學生の社會に於ける客觀的地位ではなく、その學生の社會に對する任務を考へる時には必然に彼の認識に於ける問題として提出されるし、この事は知能性と彼が社會の直接的な生產勞働から分離してゐることから來るのである。

即ち、學生は社會の中にあり乍ら、又社會の外に立つて居るとも考へられるであらう。唯この社會の外に立つと云ふ意味は社會を否定することではなく

社會の　歷史的な運動を觀察せんとする態度であるにすぎない。ここにこそ學生本來の眞實の教養があると思はれる。學生の教養とても教養たる限り教養一般の中に含まれるが、現實的な教養は特殊の中に於ける一般こそ重要なのではなからうか。

以上私が簡單ながら觸れて來たことは、結局教養の問題が決して道德上のそれではなくして認識の問題と共に、より根本的に社會關係の即ち階級關係の問題であること、推しては教養が客觀的存在たらん限り、社會の歷史的な運動法則と共に發展、進化し增進してゆくものであることこれである。粗雜ながら規定の枚數の樣だから筆を措くことにしよう。（三七●一二●一〇）

冬の陽に白鳥ひとりしづかなり

新委員會に望む

一

昭和十二年は逝かむとする我々は多事なりし一年を回顧反省すると共に次年度に多大なる期待を持つものである。先號「回顧」にも述べてあつた如く、今年度の委員會は多くの缺點はあつたにせよ「學問の出來る樣な學校へ」を一枚看板として兎に角學內改革の契機を作つた點は何人も多とせざるを得ない。勿論多くの不滿の點もあつたが、すでに事務の引繼を終つた今此等の批判を置いて次年度委員會に對する希望を述べる事が最も有意義であると思ふ。

委員會の任務は「學校らしき學校へ」所謂「學內改革」の一語につきる。此の問題こそ現代の關大にとつてはアルファでありオメガである本學を良くする事は經營者の責任であり教授の責任であり、學生の責任である。即ち三者の共同責任である併乍ら學校の設備に就ては理事の責任であり教學に就ては教授と學生の責任であつて、茲に責任の二元化が生ずる。之れは齊しく私學のなめつゝある不可避的な癌である。さればと云つて此の癌を放置すべきでない。本學に於て此の癌の切解を望むならば、一方に於ては學生は教授の監督者たるべきであり、他方に於て、教授と學生の緊密なる結合に依つて理事を督勵しなければならない。而して之れを有機的な運用に導いてゆく大きな義務が委員會に懸つて居るのである。

二

學生は學內の制度、教學方針に就いて公の發言機關を持つて居ない。夫れにも抑らず學生は個人的にも、團體的にも、苟しくも夫れが不純なる動機に出ない限り、學校改革の爲に意見なり、希望なりを開陳すべきである。幸ひにして學生社會には學友會なる組織がある。其の元締たる委員會は學生社會の凡ゆる問題に對する之等の意見なり、希望なりを反映させてこれが適切なる處置を講ずべきである。

併乍ら一般に委員會と學生一般とが、動もすると乖離して居るが如き觀を與へて居るが、之れは委員會の成立から見て不可解であり、眞に遺憾とする所である。其の罪の大半を委員會に歸してあながち誤とは云へないであらう。何故なれば、凡そ委員會は學生社會の社會問題に關して一般學生が如何なる意見を持つであらうか、と云ふ事が反映せしめられた結果であるにも拘らず、往々にして獨善的な行爲の在つたのは否み難い事實だからである。

三

學生諸君も各自の意見を持つであらう。此の學內の社會問題に關して正當なる注意を拂ふ事は、又學生の義務である。併乍ら夫れは委員會が積極的に働きかけ一般學生との間の最も有効適切なる意思交流の機會を與へてこそ期待し得るのである。學生一般の全然知らぬ間に建議せられ陳情せられた問題が果してどれ程の効果を齎らしたかを反省しても慚然たるものがある。

教授も學生も省む所は一つである。即ち「學校を良くする事」これである。我々は學つて學內社會問題を批判し、我關關西大學々園の團體生活を向上すべく努力したいものである。

希はくば十三年度新委員會が「小事に忠ならざる者は大事にも忠ならず」を旨に體し清新機剛の正氣溌り溢れん事を。願し清新機剛の意氣溌るゝ處にのみ進歩はある。

十三年度に廻された未解決の問題

坂本委員會、大童

別項の如く富永委員會ののこした事業を承け繼いだ坂本委員會は「不言實行」をモットーとして鋭意學友會の業務に携はり、目下十三年度豫算編成に大童になつてゐる。富永委員會が「宣傳」に重きをおいたに對し坂本委員會は「不言實行」であつてこの兩者は面白い對照をなしてゐるが、とにかく富永委員會に於いてなされた「學內廓清運動」を繼承してゆくことに變りないから、富永委員會が未解決のまゝ坂本委員會に移牒した諸事項のうち、重なものを列擧して坂本委員會の責務を明にしよう

一、學友會名稱變更の件

「天六」は地名であるから將來學舍を移轉すれば當然改められるべき性質のものであり、また不幸にして暫く移轉を見合はすものとしても「天六」なる詞の惡印象を到底忍び得るものでないから名稱變更は當然決行せらるべき運命にある。

また同じ變更するのであれば、一年も速にこれを決行することに依つてその不便を蒙る卒業生數を可及的に少なからしめることが肝要である。

二、支那語正科編入と第二外語の一年より開講の件

支那語正科編入の必要性は既に述べて來たから之を略すが、東亞研究會の建議に基き既に當局へ陳情してゐるのであるから、それが促進をなすべきである。また、第二外語を一學年から開講すべしとの問題は度々表面化するにも拘らず未だにその實施を見るに到らない。之は他の學校の實情を援用して極力當局の尻を叩かねばならない。

三、一部二部合同協議會の陳情事項

時局に鑑み態度を見合はしたため陳情八項目ともに闇に葬られたかの如く思はれるがこの八項目は今後も尙繼承すべきである殊に「學舍移轉」と「學部無試入學の特典附與」の陳情は實現を見るまで絕對にそれが運動を弛めるべきでない。

四、學友會館建設資金積立の件

五、皇道宣揚會資金の件

六、出征學生遺家族慰問の件

大學祭の事業として三部合同協議會に於て決議した本件は、其後そのまゝ放置されてあるが、六〇〇圓の金員が計上してあるのであるから速かに三部合同執行委員會を組織し、それが使途を講ずべきである。

七、委員會先輩團結成事務

共濟部役員決定

選擧の結果十三年度共濟部役員は次の如く決定された。尙、その事業は明年二月事務引繼後に始められることになつてゐる。

部長　根本大五郎

役員　（法科）小松邦男、久野龍、伊賀上壽雄（經濟）今里達雄、田山久美、次點奥平（商科）大方敬藏、松岡龍雄、辻忠勝、西川一行、佐武大文、民谷寛三、龜井英、次點梅田

南京陷落祝賀式

十二月十日國民齊しく待望してゐた南京が陷落したので、この歷史的戰捷を祝すべく翌十一日夜學友會、皇道宣揚會共同主催のもとに全學生參加の大提灯行列を擧行した。

また十四日午前十時四十分より校庭に全學生參集し、南京陷落祝賀式が行はれ、皇居遙拜、伊勢神宮遙拜、護國の英靈に對し一分間の默禱を捧げてのち、神戸學長の式辭、派遣各部隊司令官に祝電發送、學長の發聲で萬歲三唱して十一時十分終了した。

後繼坂本委員會

既に十三年度事業を開始

坂本新委員長

去る十一月廿四日本部會議室に於て學校側（會長代理古川教授、庶務主任、松崎教務主任）十二年度委員幹部立會のもとに十三年度學友會新委員の辭令交付並に新委員會の役員決定が行はれた。即ち、はじめ古川教授から各新委員に辭令交付があつて、會長代理として同教授は新委員に對しまづ親辭を述べたのち「一致協力して學友會のため努力すると同時に學校側との協調を切望する」と激勵して挨拶を終り、續いて富永委員長の指圖に基き十三年度新委員長の人選に移るや、山崎孝三郎君の推薦せる坂本龍夫君が萬場一致を以て新委員長に推され就任することとなつた。

かくて坂本新委員長、議長となり役員決定方法を審議したが結局委員長一任となつて次の如く各役員が發表され、十二年度と十三年度との事務引繼を完了した。

委員長　坂本龍夫
副委員長　太郎良松美
會計係長　山崎孝三郎
記錄係長　中村彦一
庶務係長　高田一己
運動係長　永谷文雄
文藝係長　馬川喜久三
共濟係長　根本大五郎

應援團の廓清工作に

肅正隊愈々自滅

從來、應援團については種々取沙汰されそれが改革を一日も早く斷行すべしとの意向を有するもの多く、年々その幹部に於いて自己廓清をなしつゝあつたが、このほど十二年度幹部はその事業を次年度に引渡すに際し、大々的自己廓清を行ひ、各方面からその將來を期待されてゐる。

即ち、今まで運動部に遍する傾向のあつた人員起用を一般化するとともに、動もすれば元氣に逸し易い弊を除くため自省自戒の目的をもつて團內に風紀係を特設することとなり

かくて過般來、應援團と宿命的對立關係にあつてその存續性の困難を喧傳されて來た風紀肅正隊との合併が問題になり、兩者の間に折衝が行はれてゐたが、風紀肅正隊が徹頭徹尾この申入れを拒んだため、遂に應援團は獨自の立場をとつて既定通り風紀係を設けることゝなつた。

このことは却つて風紀肅正隊の解消を早める結果となり、確聞するところに依るとその後辭表を提出する隊員續出し、今では隊長、副隊長ともに辭表を提出して殘るものは二三名に過ぎなく、豫測通り自己崩壞の運命を辿りつゝある

尙、風紀肅正隊の建直しに關し次年度からそれを強化するため學校當局が隊員の人選を行つてこれに任命するとの憶測をなすものもあるが、風紀肅正隊そのものに對して一般學生が反感を抱くに到つた現在では、如何なる改革工作もよい結果を齎すものではない。このことは肅正隊を發案した二部に於てすら、もはやこの存續の不可能なことを自認してゐる事實から見ても想像に難くはあるまい。

迫撃★砲

十月四日から門衛氏の仕事が一つ增えた。何を思つたか急に校門で出缺をとる樣になつたのである。

風評によると文部省からの御達旨であるらしいが誠に結構なことだと思ふ。そして、校門で判を押して貰ふと、廻れ右をして歸つて行く學生を見ると憤慨に耐へぬ、

朝から一時頃まで何時でも押してくれ、四五校も一緒に、又昨日の分までも一緒に押して呉れる門衛氏の紳士的態度にそれ等の人は恥ずべきではなからうか。出缺表が校門を通過した證據だけの意味でいゝであらうか。更に十月六日には明日の分と一緒に、十二月十五日には後の三日分を登校したものと見做すといふ大襟度を示して居て氣持の良い限りである。當局あの濫情主義を徹底させて十日分或ひは一月、一年毎にまとめて出缺をとる樣にして呉れないだらうか。門衛氏も手數がはぶけて、當局も學生も門衛氏もみんないゝといふもの。

うちの學校では怠惰な學生を非難するのも一寸考へる必要がある皆が背德行爲をしなかつたら果してどうであらう。教室に全學生が這入つたとすればどうであらう。机が無くては勉强など思ひもよらぬこと。やつぱり喫茶店で關大スピリットを發揮する學生も望ましい。授業料が澤山入れば學校も儲かるし

文部省には成績良好、學生はオール出席、お家萬代誠に芽出たき限りである。（Y生）

「北東の風」觀劇後

久板榮二郎氏に物を訊く

新劇研究會

同好のグループよりなる新劇研究會では十二月四日大手前國民會館における新協劇團の「北東の風」を觀劇し同會館地下室に於て久板榮二郎氏（「北東の風」原作者）並に杉本良吉氏（同演出者）を圍んでものを訊く會をもつた。

×

久板氏は「北東の風」「千萬人と雖も我行かん」の二つに關し次の如き感想を述べた。

「現實の深さ、恐しさに自分がうちまかされつゝ尙、たち向つてその現實の姿を出來るだけ忠實に築き上げ……そのテーマを有機的に統一しようと努力したそのうちに創造の喜びを感じ、生々したもの、恐しきものを發見する悅びを感じた。……公演を觀て第一部は構成として不備が多くありながらも迫力があつて、その現實的な感銘には自分ながらうたれる。第二部には形式的な統一をなさんと努力した結果第一部ほどの迫力が出るかどうか未だ考へねばならぬ最近瀧澤君はテーヲヘのない演技を研究してゐるが……第一部には第二部に比べて論理的な必要から生れ且つ心理的藝術的に不必要なテニヲハが、非常に多い。」

夕刊大阪主催

學生座談會に

本部より二名出席

十二月十日夜、四ツ橋電氣科學館に於ける夕刊大阪新聞學生版主催「學生新聞人と女專生との座談會」には本新聞部より森崇、山際の二君が出席した。

はじめ勝本鼎一氏（同社取締役大阪商大講師）の挨拶があつてのち「時局と學生」「事變後の日支學生の提携」「戀愛と結婚」「學生新聞編輯の苦心」などが話題に上げられたが

當日、學新聯盟の會合に於いて大いに議論した後であり、且また時局柄と新春讀物にするためとの關係から制約されてゐる主催者側の意圖が學生側の氣分にぴつたり來ないばかりでなく司會が拙いのでちぐはぐな座談會になつて、まるで主催者にものを訊く會になつて仕舞つた

昭和十三年度本新聞部役員

部長編輯　榊原良尙
總務　山口岩太
會計　秋元東洋男
學藝　山際薫
書記庶務　安達芳郎

芦笛

▲人を殺すの刀、人を活かすの劍凡そ「實」の備はないものが「凡物」を持つ程危險極まるものなく▲今次の日支事變の勃發は、實に抑制する精神力のないものが、西洋文明の創つた殺人器を持つたからで▲パール・バックが現代の支那に就いて「東洋文明の惡い點と西洋文明の惡い點と抱き合つた姿だ」と評したのは、この危險性を指して云つたのである▲この悲劇は國家に限らず人間個人についても同樣で、その最も恐ろしきものに「虛榮」「虛飾」がある▲化粧で胡魔化した女の美を「虛飾」と云ひ身にうつらぬものを纏ふを「虛榮」と云ふ▲この「虛榮」この「虛飾」必ずしも云ひ古るされてゐる如く女の獨占物に非ず▲知性之しきところに巢食ふ一種のバルヂスにして、男と云へどもこの病魔に罹る▲例へばバッヂをつけて悅び、澤山「肩書」をもらつて寞ぶもの、この「虛榮」に根ざす場合多く▲自分自ら「卒業記念品」を作つて躍如たる徒輩最も甚だしき標本▲また、同じく「實」の伴はないものに、「偽學生」あつて社會に毒すが▲其外近時、正々堂々街をアベクる似而非學生もある▲月謝納めて更に勉學しない面々、その學生の本實を有しない點で、かの「偽學生」と何ら撰ぶところなく▲その角帽、價値なき男の頭上に泣く▲かくて、「角帽」が女を釣る具となり下れば女が「化粧」で男を吸引するのと同斷、一應無理もない▲しかしかくの如き類が繁殖すればする程その學園は學園性を失つて「虛榮の市」と化し▲これをバック流に云へば「惡い心と惡い物との抱き合ひ心中」である。その危險性、支那のそれにも劣らぬ▲彼の支那にして西洋の武器がなかつたなら今日の不幸を招來せずに濟んだ▲學生も亦、身につかぬ「角帽」があるので虛榮に隨し其本分を忘れる▲ここにかつて蘆笛子は、「學內廓清は角帽撤廢から」と先づ「角帽廢止說」を唱へたいが、唱應するもの幾何？

大阪外語支那研究會譯
支那語文法
菊判　一〇四頁　定價一圓五十錢　送料十錢

最新刊
上卷
滿洲事變後とみに支那語早わかりとかいふ表題を掲げた類書に實に汗牛充棟だ。併し其實の多くは熱心なる研究家の手にすべきものではない。本書は支那語文法の最高峰たる北平大學黎教授の「新著國語文法」の邦譯で、支那語を眞に理解し、又驅使しようとする人々の要望に應へたものである。內容概略—緒論—品詞の區分と定義—單文の成分と圖解法—實體詞の七格—主要成文の省略—名詞細目—代名詞細目—動詞細目—形容詞細目—副詞細目—關係詞細目「下卷、明年三四月頃刊行」

大阪外語教授　楠松源一著
蒙古語獨習書
菊判　一〇四頁　定價一圓　送料九錢

新刊
第一卷　文字の讀方書方
第二卷　單語及文の基礎
菊判　二七八頁　定價一圓八十錢　送料十錢

關西大學研究論集
各篇定價一圓　送料十錢

第七號
法律政治篇
天皇主權主義に於ける臣民奮興の意義　吉田一枝
滿洲國政治組織　岩崎卯一
集團社會の發達と國際的尊重の原則に付て　大山彦一
近代法律權の現段階　中谷敬壽
明治初期の身元保證　柳瀬一
婚姻法と內縁法　西村和雄
衝擊的損害の賠償に付て　木村二郎
商法第十九條ノ二論　野村健次郎
經濟篇
營業稅の課稅物件　神戸正雄
コンラッドの流通經濟の機構　赤羽丑二郎
ナヂスの經濟再建の組織　磯部喜一
商業經濟及貿易活動に就ての若干の考察　加藤正次郎
輕市に就きて　瀧澤敬一
世界經濟の段階的構造　中川重麗
日本國民經濟の段階的及成層的構造　古川貞雄
金融統制と我國の世界的意義　金子文次郎
信用資源と金融市場　正井敬太郎
倩勢　森川太郎
文學哲學篇
教育理想としての藝術道　三枝博音
孟子の檢討　藤沼貴
キエルケゴールの實存段階　大熊信行
增加率論　小島祐馬
詩人ハイネ素描　河盛好蔵
ハックスレイネ背後にあるもの　板倉聖宣
Noel Coward の戲曲　堀内敬三
Expanded Forms に於ける主觀性　山田八重
大阪市東淀川區長柄中通二ノ十　振替大阪六二五二〇番
東京市神田區錦町一ノ十一　振替東京七三八一二番
甲文堂

回顧

（辯論部）
（新聞部）

片や傳統誇る辯論部、片や新興の新聞部、同じ言論の第一線に立ちながらも、一は舌先、一はペン先と……それぞれ異つたメソッドに立つこの二つの部を並べて回顧するのも亦面白いであらう

辯論部

▽▽▽學▲▲▲友會創設以來文藝部の筆頭にあつて何時も獨り壇に振舞つて來た辯論部の傳統とその隱然たる勢力とは、彼等の先輩が築いて來た業蹟の賜物であると誰も之を認めねばならないが、それにも拘らず自他ともに許して來たこの勢力が最近どうやらひとりよがりになつて來たのを否定することが出來ない。

部長の椅子を失ひ、學友會創設以來連年の如く確保してゐた委員會内における大きな地盤から失脚し（必ずしも委員會に勢力を移植することが部の能事であると云ふのではないが）それとほゞ時を同じふして辯論部の自主性と云つたものが稀薄になつて來たようだ。これを好意的に見れば、從來外面的に働いて來たことを中止して專ら内面的に部の充實に全力を注ぐべく方向轉換をやつたのだと云へそうだが、事實は全然そうでないらしい。

◇　）　（　◇

一般にその事業を見て、マンネリズムに陷つてゐることと餘りに部員本位でありすぎた嫌ひがあるそれは、はじめ部の幹部の間に椅子爭ひなどがあつたことと併せて好感を抱くことが出來ない。

たゞ先輩のやつて來た學外遊説をその回數だけ踏襲して足れりとし、何等進歩的なものを見せて呉れなかつた。いかに社會的條件が許さないからと云つて部員同志の討論會がもてない筈はない。

▽▽▽社▲▲▲會の制約が嚴しければ嚴しい程、それだけ内面的に深く堀り下げてゆくべきでないかかくしてこそ眞に學徒としての力强さが培はれ他日立ち上ることも約束されるのだ。

また、部の統制上、部員本位と云ふことも必要であるが、しかし學友會の部であるから努めて一般會員との接觸面をもつ餘地があつて然るべきである。そうすることは方法のよろしきを得るなら部の散漫をもたらすことなく、寧ろ部の發展を促す所以ともなるのだ。岡山、姫路、市岡（市内）などの大會も結構であるが、その外に、何故學内大會、或は一般學生の參加を許すことなどが考へられなかつたのであらうか。

「言論」といふ武器を磨いてゐる彼等が、まるで家庭を留殘にして街に出歩くお喋りマダムの如く徒に學園宣傳？ばかりに乘り出して一度だつて學内を顧みないのは何たることであらう。學外進出もよろしい。だが、學内の現實と取組むことはより大切なことではないか。

◇　）　（　◇

彼等の自負する唯一の「鮮滿遊説」は十二年度における劃期的事業としてその企圖を賞讃するに吝かでないが、只京城一ヶ所の遊説に終つたことは彼等の不用意を證明する以外の何物でもない。

もし、鮮滿における言論統制の實情を豫知してなほ且つ鮮滿遊説なるものを企てたとするならば、部費を將銀の足しにして

▽▽▽鮮▲▲▲滿旅行をやつたのだと云ふ誹を免れぬ。（部の事業から云ふならば京城から引き返すべきであつた）また、一行の目的である遊説もなさずに逝々ハルビンの地まで鮮滿を見學したのであるからその報告講演を開くべきであつた。

何れにせよ、この計畫にはその裏面乃至結果から見て無理が多かつた。

◇　）　（　◇

かく見かく思ふとき、ひとりよがりとマンネリズムとに陷つてゐる彼等少數の部員が、たとひ遊説によつて學園宣傳の役割を果したとは云へ、その代價として六〇〇圓は餘りに高すぎる。否、否、それればかりでない。ひとりよがりである彼等の學園宣傳であるだけに却つて逆効果をもたらすのではないかと心あるものにとつて冷汗たるを失はないのだ。

以上は或は酷に失してゐるかも知れい、十三年度には是非學内的にも活躍して貰ひたい。

新聞部

▽▽▽此▲▲▲の四月更生した新聞は全然未經驗の新人ばかりの寄り合ひによつて作ると云ふので各方面から非常な期待を以つて迎へられたが、そのタイトルと云ひ形式と云ひ將又編輯傾向と云ひ從前のそれと趣を異にして、實に新鮮な感で好ましいばかりでなく却つて小憎らしい感さへする。誰かこの新聞を評して「豆戰艦だ」と云つたが、それは至言であると思ふ。

この種の型をとつてゐる新聞が甚だ少く【例＝「日本讀書新聞」「土曜日」（廢刊）】社會の商業新聞を見馴れてゐるものには妙に映ずるかも知れないが、大體新聞の形式は一つの慣習によつて作られたものであつて「社會新聞」の型のみが新聞の型であると定つてゐるワケでないから、この型でも充分「新聞」と云ふことが出來、そればかりでなくこれには保存上簡便と云ふ特典すらある。紙質をよくしてゐるのもそのためであるらしい次に編輯傾向であるが、この新聞は學生の作品に重點をおいてゐて、他の大學新聞が「氣取つて學生が背廣を着た」觀を呈してゐるに對し未完成なアマチュア臭いところがあつて好ましい

◇　）　（　◇

▽▽▽褒▲▲▲めることは藥にもならないから惡口を二ツ三ツ並べることとしよう。

この新聞のイデオロギーが明確を缺いでゐるのは、それが其礎時代であるためか、それともその屬する學友會なるものに確乎たるイデオロギーをもたせることが至難であるためか……。何れにせよ、その編輯振りを見てゐると何んだかその場その場のお茶を濁すと云つた遺繰をしてゐて、一つのよりどころ乃至立場が一貫してゐないことはこの新聞の致命傷である。

之とともに考へられるのは部員がよくも揃つて「新聞」を出すだけで悦に入つて「新聞」の研究を怠つてゐる爲新聞に關する一つの理論すら知らないものが多いと云ふ事である。ここまで徹底すると腹も立たなくなる。そうした靈の禊についてゐるバッヂは新聞と何の緣もない單なる飾りであつて、何處を叩かれても「新聞部員でござい」とは云へない筈だ。

また、この新聞が學生の文藝に重點をおき、且つそれ全體が如何にもアマチュアらしいのはいいとしても、今まで六回の何れの新聞も學生の教養の貧困と、書ける學生」の少ない事とを遠慮なく曝露してゐて氣味が惡い

◇　）　（　◇

▽▽▽嚴▲▲▲密に云ふならその外にも多くの缺點を指摘し得るが、豫算の少額・小數の部員・部員總てが未經驗―この三つの惡條件のもとに「月刊」と「一回＝八頁」を目標に頑張つた努力は買つてやらねばならない。殊に他の新聞部に比して非常に少額の豫算を以つて他の新聞なみに「月刊」（週刊の新聞もあるが）を目標にすることは相當困難が伴つて、それだけ部員の犧牲も大であるわけだが、學生新聞はその學園の文化的推進力として大きな役割を擔ふものであるから、是非とも「月刊」を續行して貰ひたいものだ。また一方に於て、インテリゲンツアを自認するものであるなら此の部員の努力に對してそ知らぬ顔は出來ない筈である。

學生新聞はその學園全體の反映であつて、新聞のいいわるいは直ちに全學生の教養如何を示すことになるから、全學生は須臾も等閑視することなく、學つてこれを死守すべきであり、そのためには先づ續々投稿することが必要であるこうした「發表機關」がありながら、之を全然利用しないのは自ら文化人たるを放棄する樣なもので學生としてこれにまさる恥辱はあるまい。

（一二、一五）

木林璃兒

學友會の――惡い傳統

發展途上にある本學友會の十二年度の事業が全般を通じて活氣的廓清期であつた事は既に本紙によつて應報ぜられて來た如くであるが、十一月から十二月にかけて、委員會をはじめ各部とも十二年度の事業を終り、夫々十三年度の新メンバーのもとに新しくスタートし非常なハリキリ方である。

しかしながら、過去の事實から徵して見るに、漸く事務に馴れこれからだと思ふ頃には既にその年度末を控へて事務を引渡ねばならず、その發揮すべき餘力の如何ともし難きを嘲つ奇現象を示し

また一方、年度の新まる毎に全然未經驗のものが新規の事業に携はるため、はじめからやりなほしと云つた觀を呈し、それが年々繰返されてゐる有樣であつて年度毎に同じ道程を一進一退、低徊するばかりで全體としての發展が何時までも遲々としてゐる樣に思はれる。この二つの現象は文藝部に於いて殊に顯著である。

何故かくの如き狀態にあるか―一般に學生の努力が不足であることに原因するのは勿論であるが、それよりも、各部を通じて上級生と下級生との協調がうまくとれてゐないことを擧げねばならない。

卽ち、幹部になつてゐる三年生ばかりが獨占的に仕事をして、後繼者であるべき二年生を動もすれば輕視し、且また他面に於いて二年生が事業を三年生に委ねたまゝ補佐しようともしないことなどから、上級生と下級生との協調がとれないのである。

これは本學の惡い傳統であるが、學友會の事業遂行に學級意識を濃度にもつことは好ましいことでないばかりでなく、殊に文藝部において、そうしたことから素質ある下級生の向上を阻止することは愚かしいことである。この點、十三年度の文藝部各責任者は特に留意すべきである。

就任の辭

學友會委員長　坂本龍夫

不肖私今回全學友諸君の輿望を忝ふし昭和十三年度學友會委員長の重職に就き大任を負ふに至りました。これは洵に光榮に存ずると共に其の責務の重大さを痛感致して居ります。

元來私は淺學菲才でありますが幸にして學校當局の深き御理解と厚き御協調とを得尙又全學友諸君の不拔不缺の一致團結せる御後援を得ましたならば必ずや私の重責を果し得ると確信して毫も疑はない所で御座居ます。

顧るに我が天六學友會が年々非常な飛躍を爲し創立日尙若くして今日の輝かしき發展を見ましたのは是實に幾多先輩諸氏の眞摯なる御努力の結實に外なくこゝに謹んで先輩諸氏に深甚なる感謝の念を禁じ得ないのであります。

扨てつら〳〵憶ひまするに我が專門部一部、否之と不分離の關係にある天六學友會の現狀は學友諸君周知の事實でありまして改善を必要とする點決して尠くはなく所謂理想の彼岸は遙か千里の彼方にあるのであります。

斯くの如く非常に重大なる發展途上にありますところの昭和十三年度學友會委員會はより一層の自覺と英氣とを以て結束し尙且學校當局並に學友諸彦の御協力の下に學友會の使命を達成せねばならぬのであります。

昭和十三年度委員長としての私の方針は敢て大々的スローガンを掲げるよりも着實に而も公正な立場から愼重に判じ是なりと斷じました事は斷々乎として處理して行きます。所謂不言實行主義であります。そして從來の陋習を破り明朗學園の實現に盡力致したいと固く決意して居ります。

時恰も我が日本帝國は擧げて非常時に當面して居ります。私達は此の時局に眞に相應しい銃後の國民として又關西大學專門部一部學生として其の品位を保ち體面を重んじ且本分を忘れず學事の研鑽、人格の陶冶に精進しなければならぬのであります。

終りに重ねて全學友諸君の御健康と御奮勵を祈りますと共に眞の團結を切望して已みません。

簡單でありますが是を以て就任の御挨拶と致します

（昭和十二年十二月十日）

冬服の御用意は出來ましたか
洋服の御注文は
是非!!
流行の尖端をゆく
洋服デパートで
心齋橋
洋服デパート

クラス會
座談會
その他の御集會に
味に輝く食堂ビル
北極星
南區戎橋電停前
電話戎(五八三七)(五八三八)番

安くて
感じのいい
レストラン
新味覺
北進
北區天六京阪前
電話堀川二四九八番

皆樣の休息所
休講時間にでも
是非どうぞ
喫茶"白鳥"
大阪市東淀川區
天神橋筋七丁目五六
但シ市電天七電停東入ル南側

お食事は
うや
ます
いい
力
堂
天七
電堀川七五六

皆樣の
同人誌
雜誌
會
トンリブ
印刷の御用は
指定
關西大學
學天六
學友會
共濟會
學友會
部
圖書
出版
高級寫植
印刷
リブトン
關西堂
大阪市東淀川區長柄中通二丁目
關西大學正門前
電話堀川二七一一番
振替大阪一一九四八一番

戯曲「北東の風」について

池田信之助

〃〃　人間の生活を素材とし
或る　てとりあげ、その人間生活を通して流動變化複雜極りない現實社會の一般法則を洞察し、批判解剖して眞實眞理を追求するといふ意圖の下に創造生産しようとするのが眞の藝術目標である。

此の見解に於て演劇（こゝでは所謂新劇を考察對照とし、在來の歌舞技其他は除外する）を考へて見ると、人間生活を描いて一應は手際よく小綺麗に纏められてゐても、その人間生活の背後にあつてそれを規定する現實社會への作者の透徹せる洞察と、逞しき批判精神と主張によつて裏打されてゐない戯曲は、單に一個の人生模寫であり淡彩の風景畫に過ぎない。人生の日常茶飯事も現實社會との關聯の中に描かれて始めて眞に藝術價値があるのであつて、唯單にそれをそれだけに描くなら文學通り人生の茶飯事であり些末事に過ぎない。「劇作」誌同人達の作品が如何に技巧に富み、氣の利いた構成を有つてゐても、猶且つ吾々にアッピールする力の弱いのはその創作態度が單なる模寫に終始する故である。

しかしながら、個性もなく、血の通つた生きた人間の觀もなく、恰かも舊劇に於けるが如き善惡二つに類型化された人物が、作者の批判精神なり主張なりを生硬のまゝで、舞臺で代辯するに等しい無味乾燥な公式主義圖式主義演劇も亦藝術價値に乏しい。

以上は甚だ大雜把な云ひ方ではあるが、往々にして創作戯曲に見る缺陷である。だが戯曲創造に當つて、作中の諸人物が其の脈搏體臭を感ぜしめる程に充分具體性を以て描かれ、それとの關聯に於て現實社會の歴史的必然性を適確鮮明に表現するといふことは、舞臺上の種々な制約等があつて他の藝術に比し一層困難である。

久板榮二郎氏は戯曲「斷層」によつて前述の意圖の下に新スタイルを求めて再出發し、更に一ヶ年餘の調査と構想の後「北東の風」を完成した。その戯曲は明治三十四年より昭和五年まで約三十年にわたり

〃〃　資本主義の發展期より
日本　隆盛期に於ける紡績産業界の巨人豐原惠太を中心として書かれた、スケールの雄大な、社會の豐富な、又社會各層の關聯と其の各人物性格の洞察の深い描寫の行き屆いた大作である。

久板氏が「北東の風」製作に當つて豐原惠太の性格事跡等を渉獵して、彼の人間的な誠實さに一種の感激する抱いたと云つてゐる如く、豐原の東亞紡に於ける有名な家族主義は決して爲にせん體のものでなく、彼の誠實さよりの僞らざる表出である。しかし所詮は一般資本家が辿る社會法則の埒内を出ざるものであつて、昭和四年の世界的經濟恐慌に際しては東亞紡株を花形株として維持するため株主には三割五分の配當を續ける一方、職工には四割の減給を斷行しようとする副社長横倉の提案に對して一應の反對はするが、結局承認せざを得なかつたことが充分にこれを證明してゐる。だが彼の誠實さは官僚と抱合して金融大財閥のエゴイズムと强力支配、政治の腐敗等と戰ふために彼を政治界に驅立てた。彼の戰ひは社會各人がもつと誠實でありさへすれば猶資本主義の平和的發展があると信ずるところに根據があり、その故に滔々たる大河の流れにも似た現實社會の大なる動きの中に、動きそのものと自らの力を理解せざる豐原惠太が喘ぎ呻きつゝその動きに抗せんとしてゐる觀がある。哀れむべき豐原の悲劇であり、喜劇であらう。（「北東の風」を讀んで。一九三七・一二・一）

第二幕と第三幕の間で仁木獨人君の挨拶があつて、豫定の朝日會館公演が國民會館に變更になつた斷りがあつた。國民會館の舞臺設備不完全の故に幕間時間が長引き舞臺効果が稍削減され、而かゝ第五幕第一場が上演時間の都合でありら省略されたのは甚だ遺憾であつた。

人物については瀧澤修の豐原惠太が非常によかつた。

〃〃　第二幕以後漸く圓熟味
特に　と重厚さを加へ、而かも内に烈々たる熱情を堪へた人柄がよく出てゐた。小澤榮の横倉もその人らしい圖太さがあつてよかつたが、臺詞の點で横倉一人が原作に近い關西訛で話し他の人物が東京訛であつたのは耳障りである。毛利菊枝の駒子の控へ目な演技も好意が持てた。しかし大體に於て各人物が夫々熱演してゐるに拘らず豐原に較べて非常に見劣りがした。これは戯曲に於て豐原が充分に具體性を以て書かれて居り、他は比較してかなり不充分であるが故であらう。第四幕第二場産業同志會婦人部幹事會は所謂「ござあます」的奥樣連中の無智振りを遺憾なく表現してはゐるが、餘りに人物が類型的で全幕を通じて最も面白くなかつた。

何といつても大詰の劇的な盛上りは立派であつた。豐原惠太が三十年間その人間的な誠實さで育て上げて來た職工たちから、その溫情主義を「巧妙な搾取」と完膚なきまでに罵られ、呆然として爲すところを知らず、而かも彼の誠實を理解せざる職工達の言動（即ち豐原謂ふ所の「人心の惡化」）は爲政者の政策指導宜しきを得ざるものであるとして、危險を冒し憤然として「議會だッ」と絶叫して出て行くあたり觀客を魅了するものがある。

此の大詰で職工代表の一人古谷東亞吉の母トミの自殺が報ぜられ一層切迫した雰圍氣が醸し出されるのであるが、惜しいことに第五幕第一場が省略されてゐたゝめにトミの自殺がかなり唐突の感を與へる此の伏線として前記第一場が必要であり重要である。

全幕を見終つて俳優たちのうまくなつたことを痛切に感じた、舞臺裝置もよく新劇特有の薄つぺらな感じが全くなくなつてゐる。

豐原惠太のモデルと看做されてゐる故M氏と何らかの關係ある如き人々がかなり多く見受けられた。東京公演の際劇評家鈴木英輔氏が云つてゐた如く、この人たちが「北東の風」特に豐原惠太を如何に見、如何に解したであらうかと考へざるを得なかつた。

とまれ良き芝居を見たたのしさで、暗く寂しい大阪城の濠端を初冬にしては寒い風に吹かれて暫らく歩いた。

（筆者は本學生出身）「北東の風」「大阪公演を見て。一九三七・一二・三）

「北東の風」を觀て

辻部政太郎

今年度の新劇界に於ける一つの收穫といはれた「北東の風」が新協劇團の手によつて關西でも公演されたすぐれた創作劇が待望されて久しく、又一方新劇に於けるリアリズムの問題がいろ〳〵な角度から論究されもしたが、それらに對する一つの具體的解答乃至試驗臺として、この「北東の風」の結果は甚だ興味あるものであつた。

舞臺的成果を見て、多くの喜ぶべきものを感じることが出來る。歴史劇として一つの水準を示した「夜明け前」一、二部や「科學追放記」にはまだ靜止的な心理主義的リアリズムの手法の跡が濃く、それに對する一種のアンチ・テーゼとして試みられたかに見える「どん底」には、解釋、演出、演技のあらゆる面にアンサンブルとしての不統一破綻が覗かれた。

しかし、比較的これまでの新劇が扱ふことの少なかつたタイプの人物を數多く持つてゐるこのかなり複雜な戯曲を、全體として、あの程度に形象化し得たのは大きい成功であらう。

成功の大きい要素を占める戯曲については、同じ作者の前作「斷層」よりも遙に進展が見られ、主要人物の各タイプも「斷層」の各人物よりは、ずつとはつきりしてゐるし手堅いドラマツルギイは、第一部、第二部「千萬人と雖も我行かん」未公演）を通して幅の廣さを增してゐる。

慾を云へば、産業資本と金融資本との對立、矛盾といふ主要契機が、もつと何らかの形で一般觀衆にも呑みこめるやうに描かれて欲しく、其點で豐原惠太といふ恰好の主人公の個人的色彩が一人拔け出して先走りする印象は否めない。但しこのことは、作者が主人公に同情をもちすぎ、「惚れすぎた」といふ非難とは別物である。主人公の内部に深入りするといふことは、ある意味で、もつと過ぎてもいいくらゐでむしろこの戯曲のもつ一つの大きいプラスだと思ふ。但し他面に於てその悲劇の客觀的背景がそれに應じて强く浮彫りさへせられればである。

さういふ意味で搖籃期の第一幕と三十年を隔てた第二幕の間にもう一幕附加して東亞紡産業資本の成長とその内部に孕む弱點とを點出して置くことも一つの便法ではあるまいかと考へる。……

それはとにかく、この野心的戯曲を、ほゞ滿足に近い程度に、仕活かした新協の演出（杉本良吉）と演技の合體は褒むべきである。

主人公に扮する瀧澤の力演好演技は、十分東京公演當時に於ける定評を裏づけるもので、第五幕の難しいシチュエーションを含む劇的クライマックスも、むしろ臺本の指定以上に出てゐたといへやう。

もう一つ目立つたことは全體の演技水準がほゞ揃つて引上げられて來たことで赤木蘭子（古谷トミ）三島（守人）小澤（横倉）中村（矢野）北林（吉川夫人）三好（京子）毛利（駒子）鶴丸（加賀見）等それぞれかなり難しいタイプがほゞよく形象化されてゐた。

スター・システムでないそれが成功した場合は、又一段、演出、演技の豐富化がしるしづけられやうからである。

（十二、十二、十）

劇界小觀

△山田生

友田

共助の悲壯な戰死の報は、劇界に少しでも關心を持つ者の胸を强く打つた。私は彼にはホンの一面識しかないが、イプセンの「幽靈」を始め幾多の彼の舞臺を見、常にその眞摯なる藝術的態度と、幾つかの名演技によつて示されたる彼の藝とには、少なからぬ憧憬も持ち、殊に最近久保田萬太郎、岸田國士等と共に文學座を興して新しき活動に入らんとしてゐたことに對して、多大の期待を掛けてゐただけに、深くその死が惜まれてならぬ。「友田程の藝術家をムザ〳〵殺さなくつてもよさそうなものだのに」といふ感じを懷くものは豈私一人ではなからう然し又考へて見れば、ルンペンの集まりの如き支那兵と遣つて、如何に日本兵が頭もよく、强くもあるかといふ點も、斯ういふ所にあるのだらうと思ふ。彼の戰死前に撮したといふ寫眞を見ると、銃を肩にして朗かな微笑を浮かべ、如何にも天命そのものを知つて、從容自若たるものがある。その微笑には微塵の涙もない。其處には彼もまた純眞な一人の日本國民としてひとえに國難に赴き、民族の運命の爲めに、生死を超越して立つてゐるのだといふ覺悟が現はれてゐる。

最近戰局の急速なる進展は、南京陥落の日も目睫の間に迫つてゐることを語つてゐるが、然し日支事變の眞の落着が何日になるかは分らぬ。だが何れにしても吾々は今後に來るべきなる不景氣、物價上の貧困等に對して覺悟しなければならない。早や已に興行界はニュー映畫館を除いては、到る所、不振を唱つてゐる。十月に東京中の所謂大劇場で芝居らしい芝居を開演したものは、國際劇場の左團次一座を短期特別興行故除外するとして、新橋演舞場の曾我廼家を加へてもたつた四座、しかもその出演者の顔觸れから見ても、平常時の七月か九月頃に見られるやうな狀態であつたといふ。七八九の夏枯れ月のあとの芝居書入れ時である十月としては、未曾有の現象であるといつてもよい程である。其後の戰爭劇の流行、獨蔘湯「忠臣藏」の上演等も、多分に「つくり滿員」らしい。愛劇家の多い、芝居の中心地東京に於て斯くの通りであるのだから、大阪など問題ではなからう。しかも此間現れた現象は、「今ぞ演劇報國の秋」「時間短縮、料金低廉」といふ松竹自らの宣傳による、應急的手段として行はれた演劇時間の短縮と、觀劇料の低減、そしてそれに結びついての俳優の給金削減である。そしてこれは、早急に解決するものとも思はれない時局より見て、相當長期に及ぶものと思はねばならない、時局に關聯しての演劇の最も現實的且つ基礎的な問題である。この問題といひ、演劇一般の不振といひ、友田の死を惜しむ劇界への關心者の、眞面目に時局と關聯して考ふべき問題だと思ふ。

演劇

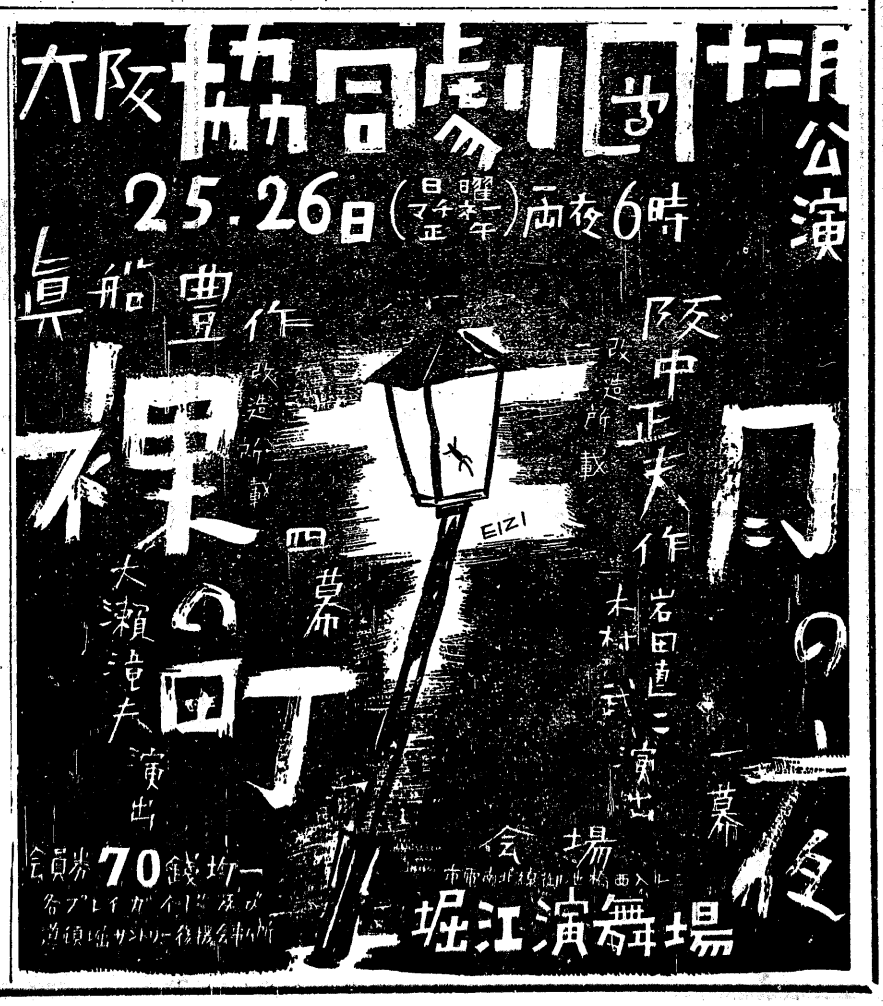
時間が長過ぎるといふことは、今迄に屢々論議されて來てもゐるし、これが爲めに演劇が有閑階級の專有物視されて來たのも事實である。然し斯かる習慣は論議の力丈では容易に改められるものではない。何等かの强制力が必要である。圖らずも今回の時局が、この無形の强制力となつて、時間短縮が實現されたのだ。そしてこれはやがて文化社會に於ける生活の方向と一致する。從つて時局落着後にも永く持續さるべき新らしき制度の出發點となすべきである。

觀劇料の低減は更に一般民衆によつて歡迎される。一部有閑階級の專有的狀態から解放されて演劇は、よく本來の機能を回復し、その使命を發揮する機運をゝみ得るからである。所謂邊中屋の支持に俟たねばならなかつた從來の惡傾向を一掃し、直に一般民衆に接して立ち、その支持に依存する事は演劇の健全狀態を保持するに最も必要な條件である。そしてこれは時局解決後にも永く持續されねばならない最も緊要は制度である勿論俳優給料の問題とそこに密接な關係がある。俳優としては給料の多からん事を希望するのは人情である。然し今回の時局が一旦解決するとも、世界的大勢は決して太平樂の夢を耽り得ざらしめるものがある。そして藝術界の人々も、一般の職業人も、日常の生活水準に多大の差別を設くる事は次第に困難なる事情が發生しつゝある。この傾向に深い認識を持つときには、給料問題の前途も自ら適宜な解決に到達せなければならない必然の制限に御き當るものと思ふ下級俳優の生活保證の問題の如きもまた、自らその中に包含せらるるのは當然である。

劇界

不振の原因は、制度の改善によつて大いに除去されることもあるが、結局は演劇を生活の必要品とする以外に、眞に芝居を生かす道はないと思ふ。劇場に行けば、國民の生活と感情に、眞によき榮養ともなり、慰安ともなるものが見られるとなれば、劇場の不振は自から解消されるであらう

關東大震災のやうな全く無意味なマイナス以外の何ものでもなかつた天災すら、これを天龍と解釋した者があつた。今や民族の運命をかけて、全國民が只一つの道に邁進しつゝあるこの劇的な時局に際して、演劇人も亦、自己の力の可能なる範圍に於て、眞剣にこの歴史的な一瞬一刻に參加する心掛が必要である。（二二、二二、筆者は本學教授）



新劇が示唆するもの
「北東の風」をみて

□……石崎義雄

一

私達は日々學校で、周圍の事象に對するたゆみなき究明の態度を教はつてゐる。よしその事象が如何に天下り的のものであらうとも、洞喝的なものであらうとも、それの正しいビルドを捉へるためには、事象の多樣なゼスチュアーに迎合しないだけの態度が要求されてゐる。

實際、私達を運んで行く、「周圍」の方向を―この「周圍」自體がまた、おのれの姿のリアルな認識を拒否せざるを得ないのだがその「拒否」する方向をも―萬全に識つてをらないと一大カタストロフの入口でとんだ悲喜劇を演ずる事になるし亦沒概念的な生活が「非合理主義」の合理化の地盤にならぬとも限らぬ。だから世紀の嵐が私達のすみ家を吹き倒してゐる昨今、その自然力の偉大さに茫然となつて慨嘆の右手を擧げたり、壞れた雨戸におり伏して悲嘆にくれるのではなくして（たとへ、その姿が以前に較べてみじめだといふ言葉で常識的に表象されようと）これが僞りのない「周圍」の方向であり、「みじめさ」といふ形式をとりつゝ、日本晴に等しい世紀のジン・テーゼへの具體化であることを確認して、散亂してゐる瓦の一枚でも無駄にしない樣に新築に備へて大切に保存しておかねばならぬ。從つて吹き飛ぶ一枚の瓦をも見失はないための「嵐の傾向」に對する敏感な感覺が、特に、現代的に要求されるわけである。

二

この樣に私達は周圍の事象に對して絕へず（例へば、憲法、經濟原論の）諸操作を通じて究明し實證をし續けてゐるのだが、いざ感覺の領域になると無責任な態度が案外一般性を得てゐるのではないかと思ふ。理論的諸操作の具體化される領域が感性的世界であるといふ意味において

事家を敏感に反映する緊迫した感覺が非常に大切であるに拘はらず、一事象の種々のニュアンス（「献金」が某軍役のもつ剰餘價値や某從業員の生活資料の控除分などを仲良く一つの言葉で表現する如く）を嗅ぎ分けることが出來ないで、感性的不感症を理論的（？）に流行させておる凜態である（同一物の逆の型が時局的ジャーナリスト）。寧ろ感性不感症から來る合理性の沒却が理論の名を借りて强行せられてゐるとも云へる。それ自身、たとへ主觀的にはいやであらうと立派に合理性によつて射拔かれてゐるのであるが。しかもこの感覺領域における一般的無責任は、それと對應して周圍の事象の傾向としても存在しておるのである。即ち歌舞伎、新派劇からはじまつてレビュ1をも含む一聯の綜合藝術（？）――それらのもつ形象形式には尙ほ攝取さるべき要素があるにしても――が非合理的感覺（感性的不感症）の訓練に隨分と、更に近時はより計畫的に動員されようとしてゐる。實際それらは面白く、愉快である。だがその陰に顚倒した現實をしか把握しえない感覺をばこつそり鑄造せんとする祕密がかくされてゐるのだ。

逆の方向から看れば、それらは感覺の領域でルーズである私達の態度に拍車をかける。事象の中に伏在する諸理由などテンデ問題にされず、事物の一面が非合理的に恣意に擴大されて私達のこの「くれた感覺をむやみにかき廻す。所

青春葬送譜

宇都宮夜詩一

柩車行き學徒に冬の空軍し
霙ふる六法も古り服も古り
北風荒び墓地も學徒も蒼ざめぬ
水雨ふる下宿にそむきし女を怒る
その小さき魔羅を悲しめり書の湯に

興の現象を唯だ御尤な現象だとして受入れるか、レデー・メードの粉飾で直ぐ嬉しくなる無批判的感覺は、完全にそれらのとりこになつて――とりこにしうる其等の形象技術は充分攝取されねばならないと思ふ――自分の斯る感じ方、見方が天來のものだ（より露骨にいへば日本人的なのだ）と思ひ込み、正しい理論形成のための感覺的入口は臭氣芬々たるオ物に閉されて、結局尊敬に價する俗物にデッチ上げられてしまふ。これらのことは、私達の體得しつゝある態度（全領域の事象に對するたゆみなき究明）と凡そ緣遠いものである。私達のこの態度を一層の完全さにもたらすためには、感覺の領域においても、今迄の怠慢を止めて鋭い究明を試みなければならない。

三

私達は去る十一月四日、新協劇團の「北東の風」を觀に行つた。外でもない。新築地劇團、大阪協同劇團と共に周圍の事象を出來るだけ合理的に（舊演劇が事象の特殊な側面を故意に强調するのと異つて）舞台に表現し觀客の歪められた感覺をときほぐして、正しい見方、考へ方を持つようにと意圖してゐる新しい演劇だからである。

新劇は昭和八年二月末の「機關車」（中ノ島・中央公會堂にて）公演以來、外目にも氣の毒な程のジクザックな道を辿つて來た。種々の條件、特に經濟的に重苦しい制約を受けるといふ事情は、それらの制約のない舊演劇に比較して、技術的に低い水準を餘儀なくせしめてゐた、だが彼等は彼等の意圖をより廣範圍の人々に實現しようと非常な勉强をした。私達の先輩が形成してゐた新響劇場も、亡くなられた豐岡佐一郎先生と一緒に大變努力されたことと思ふ。更に新劇はその持つ意圖に餘り同情をもたない人々（寧ろ周圍の事象の一傾向）から色々の制肘をも受けて來た。併しその意圖たるや決して、偶然的なものではなくて、周圍の事象によこたはる最も基本的なものの演劇的發現なのであるから、それに反感をもつ人々の被止揚が宿命たらざるを得ないといふことは明白である。

斯る新劇の一團である新協劇團が「北東の風」でどんな芝居をなしたかは、誰か他の人が說明してくれてゐると思ふ。

「北東の風」は、新劇近來の大當りをとつたが、その中に出てくる横倉欽吾こそ外ならぬ津田信吾である。劇では生溫い南風よりも烈々たる北東の風が、堅忍不拔な國民を涵養するのだと武藤山治は囁くのであるが津田にしてみれば、北東の風所か、アジアの嵐のチムールとなつてわが大陸政策を全世界に向つて咆哮してゐるといつた圖だ」

右に引用した一句は、同盟通信社の國際經濟週報（昭和十二年十月七日付）の〃時の人〃欄に書れてゐる「鐘紡社長・津田信吾」の劈頭に掲げてあつた。私達は現代的チムールが決して津田＝横倉一個人の代名詞だとは思はない。又同盟通信社の一記者が無責任にも、根本的に對立するチムール的範疇、（英國資本の侵略に更革的 auflehnung をなす範疇）と津田＝横倉的範疇とを「アジアの嵐」＝大陸政策の一色でぬりつぶさんとする時局的不感症が、敢へてこの記者一個人の傾向だとは思はない。寧ろ感性的にルーズな私達の中にも斯る不名譽な傾向が發見されることを殘念に思ふのである。それだからこそ、新協の「北東の風」――「アジアの嵐」の中に豐原惠太（武藤山治）――チムール的態樣との對立的二傾向のあることを

異常な迫力をもつて形象し私達にアッピールしてゐるのである。しかも演劇的形象は他のジアンルに優つて、生々とした人物をかつて否應なしに事象の姿を私達の腦裏に刻み込む。歪められた感性は朗かに霧散するのである。

四

私達は市井からよく、他の學生に較べて非文化的であると評される。學生でない他の人種特に××が「勇敢」であるのはその身に似つかはしく、非文化的であるのに何の不都合もないだらう。

だが最高學府で、周圍の事象に對するたゆみなき究明を學ぶ學生がその非本來的性格をもつて、一聯の武藤＝津田的「北東の風」・又はイデオロギーに沒理論的「勇敢」さをもつて對應し、無批判的に迎合する傾向があるからこそ非文化的（事象の學生的究明を放棄するもの）と云はれ、又斯る感性的不感症にあるが故に市井の暗默の批判にも「勇敢」たりうるのではあるまいか。

私達は如何なる周圍にとりまかれていようとも常に學生としての態度に忠實であり度いと思ふ。從つて周圍が採用しつゝある「嵐」の傾向に對しても敏感にそれを識別しうる感覺（それからサイエントフイク・スピリット）、をかねがね養つてゐなければならないだらう。

「新劇が示唆するもの」を大膽に汲み取らねばならぬ理由は茲にある。（一九三七、十二、十五）

神斷と法

◇……和田豊二

（社）

一

會の葛藤を神意の啓示に從て、裁決する所謂神斷は、從來比較法學の範圍に於て盛に研究されてゐるが、一般には興味本位に觀念される傾きがある。然し古代人が事件の解決に際して、その基礎となるべき學證の困難な場合に、この神斷方法に依ることは、古代人の持つ世界觀に深く根ざすところであり、從つてその限りに於て自然法理論の究明に、將又社會的正義の把握に神斷研究の法學的重要性が認められねばならぬ。私は今そうした理論的方面の陳述を差控へ二三の實例を擧げて責任の紙面を滿したいと考へる。

二

神斷の最も典型的形式は、神意に反する行爲が特定人に依つてなされた場合に、嚴酷なる神罰がその行爲の上にでなく、それの屬する社會全體の上に課せられ、而もそのことが正義に合すると信ぜられることにある。

プロタークの英雄傳によれば、タテウスの時代に、彼の友人及び近親のものが、ロウレンテウムからローマに使する代表者を掠奪し殺害した。タテウスは被害者の近親によつて復讐された。その後黑死病の猖獗によつて多數の人々が頓死し

（剩）

へ農作物も家畜も其の傳染に依て一切が枯死の狀態に陷つた更に全市に血の雨が降り注ぎ、人々は現實の生活苦に、神の憤怒に對する恐怖心が追加されて來た。同樣の災厄はロウレンテウム市にも見舞つた。兩市民はこれを神の復讐なりと判斷し、タテウス及び代表者の下手人に對して正義を行使することを急つたためであるとして、直ちに下手人を處斷した。一切の災厄は消滅し兩市は祓淨された。私はかゝる災禍を神斷として信ずる宗教的感情から古代の託宣乃至豫言者制度が發生したと考へる即ち神斷の結果を豫告し、神の不快を招かぬための社會的要求の表現として觀察する從つて神斷と託宣とは同一物の表裏關係にあると云へる。

古代希臘羅馬に於て託宣の實例は是又無數に存在する。クセノフオンは、增稅と法律の變更のために、使者をデルフキの神の下に派し、自己の欲求する計畫の承諾を仰がしめたとのことである。プラトウも亦法の變更が望ましいとされる場合には、豫言者の承認を求めねばならないと、その法律篇中に述べてゐる。スパルタに於ても、王は九年目毎に、自己が王位を繼續することが、神意に悖ることなきやの啓示を、祈願するために、獨り端坐して、月なき晴れた大空を終夜凝視するの方法をとつた。若し其の時流星を發見すれば

（彼）

は神に對する務めを怠つたものとして、即時王權が停止され、デルフキよりの神の使者が復權を告げるまでは、身の清淨を保たねばならないとされた。ローマに於ては古代公法の規定により、重要なる政治的行爲はすべて、神の承諾あることを要した。如何なる國際的協定も同盟もそれなくしては、成立し得なかつた。又新に王位に即かんとするものは、カプトリン丘の頂上に案內されて南面し、彼の左側に坐する豫言者は、天に一線を劃して祈禱文を讀誦し、新統治者が神の御意に適ひ得しことを證する具體的な表徵の啓示を祈ると云ふ宗教的儀式を擧げねばならなかつた。その際閃光が起り又は鳥の飛ぶを見なければ王たり得なかつたのである。これは神聖な儀式と俗界の統治者との密接な結合によつて、彼が神に愛護され、尊くとも神に拒否されないとの確信を持ちたいとの一般市民の欲求の現れである。斯の如き形式の神斷はアテネを始めバビロニヤ、ローマ支那等の如く星占の民族に主として行はれたものと云へるであらう今一つ例示を許さるるならば、行爲者の有罪が決定すると同時に、その者の生死も解決される慘酷な神斷の一形式がある。是も亦殆んど凡ての民族に共通な神斷であるが、その典型をギリシヤ神話中に多數發見する。

（外）

國人の血液より自己種族の血液を防護せんがために、不行跡による妊婦の眞僞を判斷する方法として當人の繃疏にも拘らず之を水中或は火中又は斷崖より投じて神斷を

（彼）

斯く凡ての藝術が鑑賞と創造により批判され得る如く映畫も又鑑賞と創造の中に批評の對象とされ得るのである。

映畫の機能が客觀性の鑑賞と創造の共同作用なるが故に其客觀的主觀批評がある基準の上に比較され評價される此處に基準とは映畫

映畫批評
その一
◇……中章

批評の精神は高き人間の本能であり、藝術を前提となす客觀的主觀の眼であらねばならぬ。從つて藝術と批評精神の依存關係が客體の主觀性に結ばれて其處に評的立場が立脚される。眞の評的精神が斯る所に有りとすれば藝術は純正な鑑賞に寄る外はなく、鑑賞と創造的發見との同時作用である。

斯く凡ての藝術が鑑賞と創造により批判され得る如く映畫も又鑑賞と創造の中に批評の對象とされ得るのである。

映畫の共同作用なるが故に其客觀的主觀批評がある基準の上に比較され評價される此處に基準とは映畫の存在意義に外ならない映畫が對象を觀客に置く以上當然映畫の存在意義を檢討すべきであると思ふ

然らば映畫の存在意義は那邊にあるかの課題が提議される。映畫藝術は一藝術ジャンルであり得る然し乍ら映畫そのものが現在藝術たり得るかと云ふに現在映畫の藝術性は未だ其の域に及ばざる所であり、其の資格の完備せる程度に未だ遼遠の低徊にあり、觀客主義の娯樂以上に存在が認められないのである。從つて其の存在意義は藝術的存在意義と云ふよりは寧ろ文化的存在意義として批評價値をより多く持つてゐるのである。即ち映畫批評は其の藝術を前提と爲す前に先ず文化を前提と爲すべきである事となる。

映畫の宿命は先づ其處に見られる。映畫は文化的存在として演劇や小說等より以上の客觀的意義を持つてゐるが故に映畫の藝術的存在は第二義的であり、其の文化的存在は第一義的に考察されねばならぬ、而して評的立場よりしても其の先決問題は藝術的批評よりは先づ文化的批評と云へる方法論が規約されるに到る。映畫批評の精神が藝術よりも文化に基準を求めねばならぬ現代映畫の內的貧困且つ窮極に嘆くと共に映畫が先進の諸藝術ジャンルに劣る自覺的認識を荷つて停滯の淵に歩み、其の領域に到達し得ざる現狀に哀れを止めざるを得ない。とは云へ映畫の文化的意義を感受し其處に文化的批判を人間の知的探究に依つて堀下げ社會文化に功獻あらしめ、以つて映畫の第一義的宿命が果されるのである。我々映畫批評家の立場は先づ其處に見られる。

從つて評的立場よりして映畫の文化性探究の流れる所に存在意義の第二義的たる藝術的存在が鑑頭せねばならぬ。

映畫藝術が他の凡百の諸藝術より遲劣なるは前述に知れる如くではあるが、映畫の文化性の批判が知的探究に依る以上、藝術的欲求に迫られるは必然と云ふべく、其の知的探究の深められて藝術的欲求に延ばされ、藝術の評的精神が叫ばれるのである。

從つて映畫の藝術性を諸科學の藝術ジャンルの域に促進せしむる事により評的精神が理想化され、映畫藝術の評的價値が高められて映畫批評の藝術的存在意義を持つに到るのである。

映畫は作品全體を構成する部分即ち脚色、監督、俳優、撮影等の諸部門の共同製作による特殊的藝術であると共に文學的、美術的、音樂的各要素を統合せる綜合藝術であつて、其處に映畫藝術の特性と存在價値を持つものであり、此の藝術的存在よりして綜合藝術の評的立場が要求されるのである。

斯る映畫の綜合性は其の藝術作品の綜合過程を多岐多樣ならしめ以つて綜合體の各要素が作品の藝術性を價値づけると共に製作機構內に於て作品に直接製作的立場にある作家即ち監督の藝術的思潮が作品の成果を決定するのである。依つて映畫藝術は作家の個性、環境、思想に準據しており、作家の現實社會に對する探究的、整理的批判的の眼こそ現代映畫藝術の作家的精神と云ふべく、批評家は作家の凡てを知る限りに於て映畫藝術の社會的存在價値に就き檢討し廣汎なる當時の社會の建設的指導的立場にあらねばならぬ。

斯く社會的現實の作家の製作意圖こそ映畫の藝術的存在の基本要素なるを以つて、藝術的批評も亦社會的現實のリアリティーに銳敏なる直感、深き洞察、銳利なる分析、そして廣汎なる統合が批評の立場を確き上げるのである。

―未完―

（筆者は本學映畫研究部員）

（二二、二二、四）

說法

嫉妬強貪、惡を惡とせず愚を愚とせず、只儲かりさへすれば其れで良いのである。

一旦利を見れば、仇敵の如き仲も忽ちにして竹馬の友となり、己に不利なりと見るや、父子兄弟の間も忽ち離散して互に相鬪ふ。

人の功を妬み人の名を嫉む、只汲々として己れの名利にばかり狂ふて暮る。

人に接するに甚だ勿體ぶり、己以外に智者なきが如く、度量小にして嗔恚の念も必らず返し、富めば尊み貧しければ賤し、其の爾一度金を見れば忽ち目玉を下げ、厚き路は御世辭の流れ口となり、足は利に走り手は慾に働く。

人は自分に制裁せし金に苦しめられ金故にの悲劇は日常に紙面を埋むれども可きは人なり。

晋ありて天地萬物あり、晋死して天地萬物死す。（山口生）

現代俳句の理解

◇……岸風三樓

「お前この頃俳句をやつてゐるさうぢやが、なか〳〵若いのに偉いね……でも本當の味はまだ解らんぢやらうなア」

當時 學生だつた私を前に坐らして小父は丼樣の燒物に澁い茶をかき廻し乍ら感慨を洩らすのだ。この小父は木堂犬養先生のふところ刀で岡山の縣政記者の大御所的存在で相當モノも解つてゐる筈なのに、かう頭から叩きつけられたのでは私も――いや小父さん、俳句といふものは、小父さんが思つて居られる樣なそんな坊主臭いものではありませんよ。古池の蛙が死んでから既に何百何十年經ちましたからね。それに、そも〳〵俳句は文學の一ジャンルで吾々純粹詩精神の眼的なる放射であつて……いや當時、こんな詞で表現出來たかどうかは甚だあやしいものであるが、兎に角、當時は當時なりに尠くともこれに似た心持ちで相當小父を啓蒙し得たであらうがその時の私には餘り小父が王手飛車に來たものだから一言の反駁のゆとりもなく

「はゝ、しかしこの頃はとても學生仲間でも俳句熱が盛んになつて句會などでも若い人の方が多いんですよ。それに婦人ことに女學生なんかもどん〳〵出席してゐるのですからね」

と笑つた。

「ふゝん、まアいゝよ、いゝことだ」

小父にはこの若僧のボヤードのにほひと「俳諧」の不調和がどうも氣に喰はんらしい。

といふよりピッタリ來ないのだらう。雪のあした、あの元祿頭巾をかぶり腰に一瓢をつるして杖を曳かないことには矢張り本當の俳句の味は解せんものと決めてゐるのだ。

ところでこれは私の一人の田舍者の小父の考へとばかし嗤つても居られないのである。

私の役所の同僚なんかでも時に「ほゝ俳句とは君また味なものをやつてゐるね。僕の大學の同窓にも一人變つた奴がゐてなか〳〵熱心に俳句をやつてゐた男があるがね…」と如何にも吾々俳句をやつてゐる連中を何か特種的な存在と規定してゐるのだ。この若さに於て俳句とは！といふ即ち俳句文學をして此國の老人趣味以外の何ものでも無いと彼らは觀念してゐるさういふ時、私は常に、「麻雀は知らないし、ダンスは踊れない、カフエーは恥しいのでせめて俳句で時間を費して置けば間違ひがないだらと思つて…」

と答へることにしてゐる

けふ も私の書齋を宇都宮夜詩一君が訪ねて來てれたので新協劇團の「北東の風」の話から今日何故一般大衆にこの新しい演劇が理解され且つ支持されないのだらうかといふ樣なことがこんにちの吾々の俳句ではなからうかと言つて笑つたことであるが、全く私達にとつてはお笑しいといふよりむしろ癪にさへ觸る樣な氣がするのである。

こんにちの學生諸君の間に於ても俳句をやつてゐるといふ事は進歩的といふことばに對して或ひは反動的なるものとして横にらみされてゐるのではなからうかと思はれたりするのであるがこれは確に笑止の限りである。

然しこんにち、學生インテリゲンチュアーことに一般大衆に吾々の新しい俳句が理解されてゐないといふ事に就いては、それにはそれ相應の理由もあるに違ひない。第一、俳句といへば元祿の芭蕉が總本山で其後のものはいづれも末社的に取扱はれてしまつてゐたこと。

第二、小中學校の教科書に於ても古典的、歴史的意義に於てのみ評價されていゝものをのみ列擧し所謂先生たちに依つてこれこそ俳句の眞髓であると觀念づけられて來たこと。即ち先生たちは、歴史を流れの裡に把握することを忘れてゐたのである。

第三、所詮それらの作品はわれわれの現代生活とはおよそ緣遠いものであつて、そこには何の面白さもおかしさもなく、折角のさびしをりを味覺するには餘りにも現代世相のめぐるましい廻轉にさへぎられてしまひ、たゞ辛うじてそこに見出されるものはこの句には季語がないとか、いや季が重つてゐるとか、切字がどうとか言ふ難しい格式だけだつたといふこと。

右の 樣な情勢下にあつた爲俳句といふものはどこまでも閑人の閑人學としか認識せしめるに至らず今日の如く大衆の支持性を失つてしまつたものと思料されるのである。

ところで吾々は俳句に於ける季といふ枠を止揚した。これは現代支那の令孃たちがあの美人の纖鑮たる纖足を廢したと同じに十七字文學の骨格をたくましくし、青年的な血色を與へたのである。そしてあらゆる傳統的なる配合觀念を排除すると共に現代文學の新しい線と極めて密接なる關聯に於いて（これは當然である）現代生活感情のリアリズム的把握こそ吾々の俳句をして時代と共に歩み且人間達と共息吹き行かしめるのであるうまごやし炭坑の娼婦帶を結はずうまごやし炭坑の娼婦帶を結はず　山口　誓子

羅を着ると乙女は笑まし腋剃るも　杉田　久女

看護婦ら秋のことばを知らず肥り　藤後　左右

春夕べあまたのびつこ跳ねゆけり　西東　三鬼

二科の午後痩せし少女とまた並ぶ　同

春祭絣が匂ふ肩をくみ　宇都宮夜詩一

神女となり美智子が舞ふよ青き風に　同

柘榴咲き處女の夢想の大膽に　井上　白文地

出征子灼くる石階を父と昇る　同

燈火管制の暗き街來て涼しからず　中村　三山

空襲來運河に鼠のみ肥り　和田邊水樓

あひびきす千人針の衢角に　同

應召の老兵いつはらぬことを言ふ　淺田善二郎

茶房晩春海のオゾンが棕櫚竹に　佐澤比呂志

時事偶成

佐澤比呂志

わだつ霧軍需倉庫の土手を這ふ
わだつ霧軍需工業の夜を守る

× ×

支那地圖の壁ヴィナスの像と希ゆ
ヴィナスの像に地球儀うらおもて
猫の戀はげしき夜を空襲す

これらはいづれも「京大俳句」誌上私の記憶にある二三の作品であるが、その何れを見ても如何に現代俳句が健康に彈力的であり吾々の側近にゐるといふ事が分ると思ふのである。

私は いまこゝに現代俳句の文化史的意義に就いて論究する紙幅を持つてゐないがこれを消極的に主觀的價値に於て見てもわれわれの躍進たる生活の裡にこの十七字の懷刀はおのれ自身の心の軌跡としてふり返つて見る時、たまらない可愛いものであり又、これ程簡便なる手帳が文藝の一つの分野として存在することはこの國の民族としてまことに幸福なことだと思つてゐる。（十二、一二、一四）

（筆者は「京大俳句」會員）

俳句鑑賞

宇都宮吉和

○歳の市の巷の室に嬉戯す　和田　邊水樓

眼を奪ふばかりの大賣出し裝飾めまぐるしく點滅するネオンサイン、吹きまくる木枯に追ひたてられ、ごつたがへす歳の市の夜を群集に揉みほぐされ蹌踉と喘ぐ一人の青年。彼の學校生活も餘すところ一、二ケ月に迫つて居る。就職のこと學校のこと家庭のこと、それに二三枚になつたカレンダーの恐怖がごつちやになつて、いらいらした此の年末の狂奮的な感情に打ちのめされながら何處へ行かうとするのであらう。顏は蒼ざめ眼は血ばしつて居る、湧き立つ樣な人波に肩をこづかれこづかれ彼は尙も歩み續ける。彼は喫茶店の前へ立止り急いで扉を開けた。女が待つて居るのである。パーマネントにしたその女に向ひボックスに腰を下すと彼はほつと疲れた微笑を洩らして汗を拭いた。こんな時になつてまでも嫌悪しなければならない「性」の法則に私は悩然となるのである。散文の一歩手前、平明であるが深刻なレアリズムの俳句である。

○サーカスの高き夜天に肢曰かり　三谷　昭

見上る空中、ブランコにピンと張つた少女の白い二本の足、天幕のその上は漠とした冬空である。星がガラスの破片の樣に光つてゐる……と書きかけて私は美しい室生犀星の詩を思ひ出した。やつぱり曲馬團の少女を唱つたものである、それで私は同氏のその詩の一小節を左に掲げて私の鑑賞にかへようと思ふ。

――前略

私は最後に五六丈もあらう高い天井の一枚の板の上で
しかもその尖端で立つたり坐つたり寢ころんだりした悧巧げな品のある澄んだ目をした
少女を見ました
彼女がその高い天井の板の上で
美しい長いすらりとした足を立たせた姿は
その胸部のやさしい高まりや
濃いつやのある束ね髪の端まで
實にすつきりと彫つたやうに
立派でした

――中略

私はどこかであゝいふ目をした女性に
いつか會つた樣な氣がしました
非常に高い階級の女のもつ樣な
高慢さと
その澄んだ美しさとです
あの上品な蒼白い容貌を見つめて居るだけでも
心がしづまります
沈痛な美が泉のやうに心に湧き上ります
彼女は板の尖端につかまつて
美しい足をそろへて
空中にぴんと立てました
なにものにも此の美しさにたぐへられないなにものも有たない
美です

――後略

（寂しき瞳孔）

○春の夜の夢なまぐさき古娘　日野　草城

人間生活のあらゆる方面に取材する日野草城は特に女性描寫の點などに於て俳壇のモオパッサンといふ感じを受ける。

なまぬるい香氣の澱んだ春の闇夜、獨り寢する老孃の惑はどろどろにちぬられた性の淫夢、妖しくも苦ほしい激情の姿態である。

なまぐさきといふ大膽な而かも巧妙な表現に感嘆する他はない。彼の並々ならぬ才氣のひらめきである。

此の句を讀むと、春の夜と老孃の生理を描くモオパッサンの小說を思ひ浮べる、拙描寫を盡したモオパッサンのその何十枚の小說に此のわずか十七字の詩は堂々と匹敵してゐるのである。

○夏の河地下より印刷工出づる　山口　誓子

此の夏新聞の校正に印刷屋へ通つた頃はとても暑くて、よく氷を喰ひに出掛けた。

此の猛暑を鉛の谷間に働く人々は元氣で一ぱいだ。活字を拾ふ人組む人、解く人皆朗らかに動しんで居る。ところが不意に地下から鐵階を上つて現れた男がある。さうだ、私は地下室にも營々と働いて居る印刷工のあることを忘れて居た、服も顏も眞黑くインキに汚れ、でもたくましい身體である、汗を拭き白い齒を出して笑つた。

印刷屋の裏は堀割で眞黑な水が流れるともなく流れ、油や塵を浮べた水面はギラ〳〵灼きつく太陽を反射してゐる。新らしい詩は此處にあるのだ。誓子獨特のハガネの樣に强靱な、新しいエスプリを持つた作品である。

○水枕がばりと寒い海がある　西東　三鬼

絶對安靜といふ前書がある。療養の句、闘病の句も澤山見るが、此の樣に澄徹した作品は見たことがない。此の場合は最早病魔への徒らな反逆でもなければ、安易な妥協でも無い、唯其處には、苦悶悲嘆、絶叫を解脱した恐ろしい迄に澄み切つた作者の心境があるのみである。

履返りを打つだけの意志、水枕ばがばりと大きく耳にひゞき、眼前には唯鉛色の冬海が荒れるのを見るばかりである。

生死の境を彷徨しつゝ作られた此の作品、作者の生命をけづり取つて彫り上げた此の作品。

是を讀めば惻々と冬海の樣に胸を打たれ、自然に頭の下るのを覺えるのである。

十二、十二、七

ヤングマン服裝專門
若人よ
新しい服裝はドウゾ
若人のみの好もしいスタイル
文句たれのお客樣
カワイのオッサンが待つてゐる
河合洋服店
日本橋一丁目交叉點
電話南三三八一番

ろは六天
いすき燒！
いろはで
御宴會は――
これからの――

寒い冬も
オーヴア・コートの
暖かさで一蹴出來る
……その御相談は是非……
ナンバ洋服店へ
電話堀川㊱0349

大學及び學生の新使命

グルセードル

支那事變は吾人に強烈な現實の力を認識せしめた。特に文化方面に與へた衝動を見逃す事は出來ない、それは支那事變の行動的現實が眞理とか文化の諸形式の內包してゐた未消化物とか矛盾と云へたもの丶醜惡な實相を鮮かに拗別しスポット・ライトして見せた、文化の混沌卽ちこれである。併し乍らこの事は吾々が支那事變を持つ事に依つて忽然として卷き起された事でもなければ新しく認識された譯でもない。唯その認識への時間が支那事變と云ふ突發的激動期に直面する事に依つて加速的に壓縮されて浮び上がつて來た迄である。

又この事は國家の持つ重大な行動的現實としての戰爭と、當面の最大關心事たる戰爭意識によつて一應文化的關心と云ふものが國民に忘れられる宿命的な運命にあり、或る程度に於ては當然かくあらねばならない事だとも云へる、文化統制と云ふ事も今日の有機的な國家の持つ當然の處置である。

だが一國の文化は平時に於ける國力の表出であるばかりでなく、戰時にあつても亦同然である。從つて戰爭遂行を防げぬ限り文化は擁護せねばならぬと同時に、文化的使命の遂行を生命とする大學及び學生の採るべき道は整然たるものがあるばかりでなく一般文化人もその地位の許す限りその文化的使命を續行するのは亦當然の事である。

現在我が國に於る文化は現實としての社會情勢との間に時間的空間的な距離を持つ事に依つて致命的な缺陷を有して居る卽ち既成文化の持つ文化的形式—學問　藝術　政治　思想等の持つ個性科學的な現實觀照の方法たる主觀的秩序としての文化意識—の停滯と違算とをば檢討すること、換言すれば新なる現實直觀より生まれ出ずるべき文化意識の要求と既生文化の再建築を要求してゐるのである。

この事は若き文化的生命を育成する筈である大學と學生に對して有識者の注目するところとなつたのである。近時、所謂文化論と倶に大學論學生論と叫ばれるもの丶屢々現はれるのはこの爲である。一頃に於ける大學の凋落と學生の惰落は毅然として排除されねばならないのである。世人は大學と學生に新しき生命を要求して居る。確固たる自我の存在意識を要望して居る混沌たる文化に對して指導的立場にあるべき大學と學生に新なる關心を向けつ丶あるものと云はねばなるまい。何故なら大學及び學生の指導性は客觀的にはその知性の放棄主觀的には「資本主義社會の過剩生產物の一種であることを認識」—（龍川幸辰氏、關西大學新聞第七十七號五面參照）—する以前の我が國の大學校史を一瞥すれば決して指導的位置にあつたのではなく、國家及び社會の求める專門的職業的知識及び技術の修得者たる學生の養成所として一種職業媒介所たるに過ぎなかつたからである。之は必然の結果として資本主義社會機構の整備と相俟つて大學を國家及び社會の關心外のものとした事は云ふ迄もない事實である。

高等ルンペンと冷笑されたインテリ層の去勢されたるが如き無意味な存在と、單なる趣味養成所たる古典的大學と反國家的思想の教授と學生の憫れなる轉落及び社會的名聲を得る爲の賣名的スポーツ偏重憂ふべき現狀である。

大學と學生は新なる生命を持たんとして居る。國家及び社會は支那事變を一轉期として、ジンメルの所謂生に於ける「イデーへの轉向」とも云ふべき大學及びその學生を客觀的に再認識せんとして居るのである。畏きあたりより上諭を給はつて內閣が設立せんとする〃教育審議會〃は新しき希望と抱負を持つて本稿を草せしめた。

時局は重大である、更に我等の使命も亦重大なりと云はねばなるまい。

（K・K・Y）

第壹回　人口問題

全國協議會（その二）

我移植民政策上に要望さるるものは

中村良之助

「國民總動員」の分野は皇軍の南京攻落と共に愈々展開したるを感ずる

今や我對外國策上移植民問題は其海外貿易問題と相並んで重要なる地位を占めつ丶ある。既に將來に向つてブロック的統制的國際關係が强化される兆のある場合に於いては此人的因緣と民族的伸長に關連する移植民問題こそは如實に國際的隆運を形象つけるものと見做さねばならないであらう。これを換言すれば我邦家の資源と生活との確立の問題であり皇國民族の自立防衛問題である。先の人口問題研究會の移植民部會は確に現下の我期待を評議するものであり又以て其要望は獨り移植民に止らざる國民的處世訓として、特に青年學徒の喚心に俟つもの多きが故に次に其大略を記し且つ卑見をも述べやう。

日本　の移殖民が濠洲や北米其他の地方でロックアウトの悲境に遭合してゐるとは云へ尙、太平洋を取まく世界に其間隙を逢ひつ丶只管に分野の擴大開拓に專念しつ丶ある事はたのもしき限りで其處に我移殖民問題の多彩と困難とが誘發される。卽ち單純平凡なる經濟的性質に止らずして、多分に國際政治的紛爭と人種民族的偏見とに抗し或は處理しつ丶進まねばならない運命にある事は一の特色と見られやう。私は此部會の報告を通じて、日本の移殖民問題は今や國家的壯擧として國民と有機的組織と計畫の合理化の期に進みつ丶あり從つて、過去の業績と個性の批判の段階にあるものと感ずる。卽ち

植民地資源の對策　拓大　阿部　源一氏

日本移民の國際的意義　早大　出井　盛三氏

南洋特に比律賓に於ける邦人移民問題　九大　三田村一郎氏

——第二世教育問題——

國民教育としての移植民の基礎訓練　大東文化學院教授　加藤梅四郎氏

移住青年指導の報告　全國學農聯盟　木內　謙一氏

囑託

右の如き報告は從來の移殖民業績に對する反省であり、皇國使命の海外宣揚に對する理想と將來への抱負を物語るものである。「海外雄飛」でふローマンチシズム、英雄主義の古型移殖民が可の壯圖を抱き乍らじかも不幸と缺陷を曝露する事ありひいては我國際進運に必ずしも適切なる効果を齎さぬ所以を指摘しつ丶今後に完璧を期せんとの覺悟を示せる事は、流石皇國民の大度量と深く一同は自肅したのであつた。此意味で移民教育は必須のもので從來の如き「泥鰌式」のものでなく恒久的常置的に內地外地を結ぶ國家的理想と一定方策を授ける事が急務であらう。三田村氏の現地二世教育の爲の內地映畫の紹介、或ひは單なる觀光に非ざる母國での再教育問題等が考へられやうし、淺野氏の如き宗教問題も考へられる。

祖先　墳墓の地を去る事を必須條件とする移殖民に就いて精神的落つきを與へん事は何よりも急務であらう。善生氏は滿鐵鐵道附近の愛媛縣出身の村落に猶田彥神社を立派に祭りつ丶ある事は如何に我移民が單に唯物的に「喰はんが爲めの」移民に非ざるを物語るものとして牢記すべきであるとの報告は深く考ふべき所である。私は此點で單純なる既成宗教といつたもの丶外にもつと大きい所の神佛、凡てを包んで內地の生活實踐を指導し國民生活を支配しつ丶ある全唯心的禁戒をも一丸として彼地に樹立さすべきであると思ふもので到底歐米人のキリスト教といつた程度のものとは違つた新なる信仰を別にする事を指摘したい。特に大陸に對し防共的意味からしても堅固なる殆んど絕對的信念を養ふ爲に、此唯心的面は極度に重んずべきでは無からうか。夫れが眞の「日本人」の要求であらう。

植民的生活の寂寞は無宗教以外の幾多の精神的要素の缺除から來るもので植民人は義理人情の世俗や安心立命の信念を共に模索しつ丶あるもので、正しく彼の「土地を賣る」「わらじを履く者」の擡土軍來の心境は此處では農民への心理に共通し行く。移植民の行動は此「賣り土地」を形心共に得んとするものと見做し得べく農民社會にありては「土地所有」は生存權の保證であり自他を通じての絕對信用問題として必生の宿願である。東大の宗教授の「土地を無償で給付すべし」との主張は敢て從來の惠恩主義、姑卽政策では無い極めて自然なる現實的緊急事態である。大陸の土地は永く所有地主の觀念の荒寞たるもので環境一般は到底我が農業制度の如く制約と訓練の內にある譯では無いので、此の大陸民に對峙する上から見ても餘りな自縛的拘束は不適當である。宜しく廣漠的に大いになすある餘地を認むべく、壯心のゆとりを充分に涵養すべきでは無いか。

彼の　北支人の北進に際しても先づ開墾實力を軍んじて土地獲得は無價であつた宗氏の例による東拓或ひは北海移民と那須開墾の對比を俟つ迄も無い。

私はアフリカ及び濠洲の地圖を見る毎に白人居住者の稀少なる事を思ふ。宜なる哉、此處を中心に植民地再分割論が其所有國に於いてすら論議されつ丶ある。斯論の發端は米人ハウス大佐でしかも僅か此間二年に斯くも迅速に世界政治に侵入し行く事は既に素地があつたと斷言し得る。

本論發生の根本原因は遂に白人の在住如何に依るもので敢て其分割國難と所有や再分は末梢的議論であらう。とまれ移植民の實在は其の力を表現するものである。滿蒙の地に對する我農民は恰も貨幣に於けるグレシアムの方則の如き關係でかへつて文化が高く優なるが故に一見其在住は勿論進出についても幾多の不利を感ずるものであるが、此際は遲慎し徒らなる議論は無用で今の間にこそ一大移植民運動を現實に展開すべき秋であらう。此爲には歐米流個人經濟的立場は結果として不利益多く、先づ國家的民族的見地に大乘的行動の覺悟が要求せられる。木內氏の日本高等拓殖學校學生に關する報告は單に移民志望學生の調査に止らざる一般學生の「行」と「實行」の養成問題につながるのである。

現下の我移植民問題は、單に當該移植民自身のみの問題では無からう。自ら志望し、或ひは選ばるるの如何を問はず卽「行く者」「內にある者」「戰地」「銃後」との關係の如く等しく各自實踐すべき大綱の樹立が叫ばれやう。若尾氏の報告は其代表であつて此意味で我民族教育、國民教育の一大轉換期を慮ぶ事は敢て、移植民の爲又は其指導階級のみでは無からう。方今の「非常時」なるもの丶打開の基礎はこ丶にあるのではないか「愛國」「國防」の意味は廣い。

移植　民は謂はば平和の戰士と待遇さるべく、かくて其行くと行かざるを通じて等しく「行」の修練をつき丶めるべき必要があらう。現教育制中の知育に偏し、御都合、成行、靜觀の意氣地無きを打開して「腕」と「忍耐」による自習主義教育は單に移植民に必要なるのみならず又其行かざる者にも必要であらう。かくて內外同身一致する所に、現下我移植民問題の意義が顯り其問題の反省段階の歷史的使命が全うされるのである。本部會の各報告を通じて此點に關しては等しく一致する所である。此意味で歐米流經濟生活觀或ひはマルサス流人口論の悲觀的宿命に置して單純に我が移植民を「喰はんが爲めに」と解し或ひは夫れの對策と考へる事は短見といへよう。

此移植民に就いて「行く者から」「行かせる者」而して行かせる事情の反省こそ、絕大なる意味を添ふるに至るものでこ丶に廣義の國防觀が湧き此平和の戰士の教養は廣く國民一般に養成さるべき原因が明瞭に登場し來るのである。此移植民問題に對する總合的構成的視觀の窮極的歸趨は國家的、國民的といふ所にあるので此爲に新部會は著しく日本主義、民族觀の旺溢するものであつたと云へよう。夫れは決して奮い壯士肌のものではない。私は過去の移植民の多くに見られる個人的分離的なる行動を拂拭して、此處に集團的總合的なる首途を意氣込む氣慨が見られ地人準一の

天地　を創造せんとする壯心を感得するのであるが此處に私が快心の微笑を禁じ得ないのは此部會に於ける幾多の特色、卽ち、總合的觀方、唯心的根據に就いてである。私は先きに公刊せる「國防政策と構成理地學」に於いて「國民（人口）勢力の問題」として既に論ずした所は今、はからずも此部會の主要課題となつて現はれた事である。多くの所論を通じて移植民業績の反省が詮ずる所、其環境への馴化と地域の特殊性或ひは日本的要素の發見と培養との努力といふ事になる。日本國家の〃Mouvement と Fixation〃であつて、廣く人口問題一般基底には勿論、移植民に就いて地理學者の干與が大いになすあるを自信したのである。本部會發表者は量と共に質といわれたが私は、人口と共に人考を、これをバンゼーに云はじむれば人間の地上の精神の地位では無いか。金田教授の報告は其點で民族と民族圈への創造過程のものとも觀られる。滿鐵田口稔氏の發表には滿洲の民度價値を含まんとする地誌的傾向を發見する。爲政者の苦心は移殖民問題に對する地理觀、乃至は移殖民の族性と地域に伴ふ各其個性と特質を把握する事であつて、理論家は往々にして此點を閑却し易い。私はパリ法科大學に「殖民地理學」講座のあつた事を思ひ出すと共に餘りに我法律萬能の弊を今更此處に知る譯である。私は本部會に此弊が無く我移殖民政策に文化的否民族觀が胚胎しつ丶ある事に對し滿腔の敬意を表するが反面に我地理學界の一日も早く

舊殼　を脫する事の必要を痛感したのである。

此文化的使命を負ひて謂はゞ大陸未開の地に海外異鄕に生活するのであるから其處に當然征服非征服に非らざる純正自我保守の換言すれば自然淘汰の理法に抗する人類の集團的必然の鬪爭を想定するのである。其の存生に關する狹義の武裝或ひは廣義の國防戰士の姿を偲ぶのである。滿蒙や南洋に對する生命線なる言葉の比喩は此處にあるので國民は須らく、地理學的素養とゲオポリチークに堪能である事を願ふ（終）

（筆者は本學教授）

男子の行路

栗田義典

我々の人生行路に於て、酒と女とが最も戒められる、まこと酒と女とに一生を捧に振る男の如何に多きか、僕はこの點につき自らを考へて見たい。

僕　は曾て、それは全く乳臭い十八の年の秋、中學の寄宿舍の窓より熱烈炎の如き？戀情を一人の乙女に捧げて失敗し、その上危ふく退學に成らんとするの痛恨極みなき體驗を持つてゐる、當時、純情多感、戀の樣に柔らかなる少年の日の胸に受けた痛みは實に激しかつた。爾來戀愛には、女性に惚れるといふことには懲り懲りしたとはいふものゝやはり僕の胸には戀愛讚美的な情熱が潛んでゐる。

まことに、おもへば、花の如くに美はしき乙女と、夢の如きやさしき戀と愛とを語りなば、青春如何なりと稱して死するものと如何に多彩ならんか等と。果してこれは僕のみの夢か、青年學生の奧胸に誰かよく戀愛讚美的なるものなしと斷言し得るものがあらう。然し乍らかく考へ來りて僕は深き哀愁に襲はれる、何かこの氣持を豁然たゝき破る如き名警句は無いものか、若人の五體を力に張り切らずごとき名句は？

山を拔く力ありともたをやめの一人にひかるゝ男あさまし

曾てローマの政治家は、生涯妻を迎へずして「予の戀人はイタリーにして予の妻は亦イタリー也」とうそぶいたといふ。これは如何、國家を愛し、國家に死なんとするこの心意氣こそ男子の面目躍如たるものがある。一人の

女　性を愛し、無上の幸福なりと稱して死するものと如何されど、女性なき人生は淋しいではないか、こ丶に我らの惱みがある。

曾て伊藤博文公は咏じた。

出でゝは握る天下の權
入りては枕す美人の膝、と

茲に於て僕はハタと手をうつて快心の笑を洩す、

伊藤公はローマの政治家より役者が一枚上手であつたと思ふ。

僕は幼少の頃、今は亡き祖父が入浴後所謂晩酌に悠然と樂しげなりし姿を思ひ起す又我々の日常に於て、祝賀會、送別會、懇親會等あらゆる會合に於て、酒が如何に重要なる役割を勤めるかを思ふ。古今を通じて男子が酒をくみ交しつつ胸襟を開き、國家社會を論じたといふ美はしき情景を幾度か聞いてゐる。

酒なくて何のおのれが櫻かな

嬉しいにつけ、吾人人類が酒を愛好したるをおもへ、酒の池を造り舟を浮べて遊んだといふやうなほほ笑ましき話もある、まこと酒なかりしならば人間社會は如何に殺風景なものとなつたであらうか、僕は酒に感謝し、その功德を讚へたいやうな氣さへ起るのである。

然　るところ、悠然たる醉よりさめて、然して自分が今やかの小ピットが大英宰相と成りし年齡に漸く近き星霜を重ね來り、吾が住む社會の現實を知り、日本と亞細亞と、世界の現狀を知り、キッと眼をあげて悠々たる男子の行路に、痛烈に希望と野望と熱と力と意氣とに身を燒くのとき、ひそかに胸奧に醉り深くも味ひ得るものは、かつて反問したる先人の戒めの言葉の眞の意味であつた、茲に於て僕は愕然としてわが野望をして野望たらしめざる日まで、確乎として戀酒を決意するに至つたのである、

戀愛のみが人生ではない。男子が眞に戀すべきは亦國家に在る、斗酒猶は辭せざる豪快さが男子の本然の姿ではない、男子の眞の豪快さは正しく、國家社會の爲めに悠々闊步するところにある。

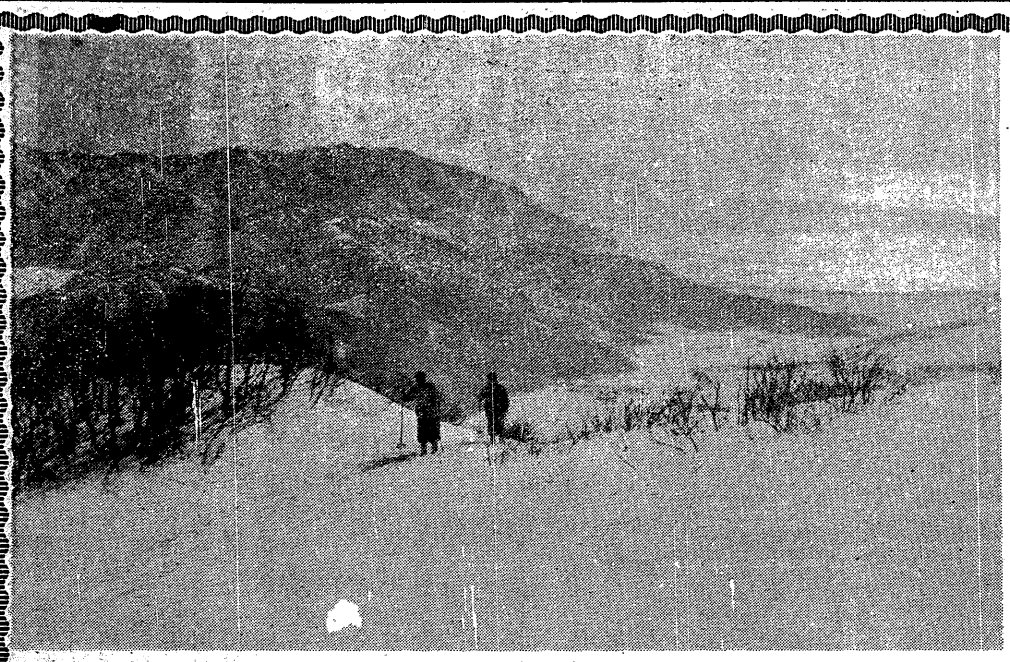
あゝ　男子の行路の悠々たる哉

（十二、十二、十一）

（筆者は本學第二部在學）

雪に鍛へよ！
スキーは京阪沿線へ
マキノ・奥マキノ

愛宕
花背
朽木
比良



（寫眞は奥マキノスキー場）

京阪電車

大同書院刊行

戰爭と物價

戰爭經濟研究會編著
大阪商大助教授　豊崎　稔
四六合判一三二頁　定價七拾錢　送料九錢

忽三版

◇戰爭經濟叢書第一編◇
戰時經濟下の國民大衆の經濟生活を直接支配するものは諸物價の運動だ。その消費生活も、財産保全も、生産も、あらゆる經濟政策も總べてがこの物價の運動を基軸として旋回する。而も我が國は戰時經濟下の物價の運動に就いて過去に何等の經驗を持たない。歐洲大戰中我が國は云はゞ局外者であつたからだ。本書は歐洲大戰中の戰爭國の諸物價の變動法則を分析して餘すところがない。

戰爭と國家財政

戰爭經濟研究會編著
大阪商大助教授　豊崎　稔
四六合判一四五頁　定價七拾錢　送料九錢

忽再版

◇戰爭經濟叢書第二編◇
獨占資本制の國民經濟は財政を切離しては理解し得ない。況や戰時經濟下に於ては、あらゆる資本の活動は國家によつて制約され、財政と市場經濟との抱合は密接になる。從つて市場經濟の變動は國家財政に極度に反射される。而も戰時の國家財政は特殊の内容を持つ。經濟人は必然に戰時の國家財政の態樣を理解することを要請される。本書はこの必要に應じたものである。

工業動員論

戰爭經濟研究會編著
執筆者代表
大阪商大助教授　豊崎　稔
四六合判一七〇頁　定價七拾錢　送料九錢

新刊

◇戰爭經濟叢書第三編◇
近代戰にあつても「精神總動員」は勿論必要であるが、それにも増して必要なのは、工業總動員でなければならぬ。軍需生産の増大、これこそ近代戰の「銃後の固め」だ。本書は主として歐洲大戰の實例によつて近代戰の特質からする工業動員の本質を明にしたものだ、これによつて始めて讀者は近代戰が工業戰であると云ふ特質を把握し得るであらう。

日本紡績業と原棉問題研究

大阪商大助教授　名和統一著
菊判上補六〇〇頁　定價參圓八拾錢　送料廿貳錢

新刊

現在に於ける日本紡績業にとつては、内外の政治的經濟的壓迫、その下に於ける日本紡業の前進自體の促すヨリ高次の政策上程への内的要請からして、原棉問題が決定的な意義を荷つてゐるのである。著者の研究はかゝる時勢的要求に對する一大寄與でなければならない。而もその新鋭なる理論は問題の所在を劃切にとりあげつゝ透徹せる分析を展開する人々はこゝに理論と事實との卓越せる統一を見出すであらう。

株主總會決議無效論

辯護士　西本寛一著
菊判上製二九〇頁　定價貳圓五拾錢　送料拾四錢

新刊

本書の表題を「判例から見た株主總會決議の瑕疵としたかつたのである」と著者自身が云つてゐられる言葉から推して、その内容については最早多くを云ふ必要はないのである。著者は會社法專攻の學徒として一家の識見の下に總ゆる學說判例を批判檢討し、現實に即した解決を與へんと試みられたところに本書の特色がある。この稀出版物の夥々たる今日、本書は正に唯一好箇の參考資料と云ひ得る。

證券法

高岡高商教授法學士　高田源清著
菊判上製五四〇頁　定價參圓五拾錢　送料拾四錢

新刊

法學博士末川博先生の序に曰く「（前略）公法・私法の兩領域にわたり、しかも半形・小切手・株券・社債・公債・運送證券・倉庫證券・抵當證券の如きは勿論、商品券・銀行證券・保險證券・郵便證券・恩給證書ないし金錢證書・受取證・各種契約書・公正證書・確定日附證書・合藍・符票の如きに至るまで、凡そ證券若くは證書と呼ばれ得るものについては漏らすところなく、實に丹念に克明に論述されてゐる（後略）」

會計學基礎原理

關西大學教授　西村勝太郎著
菊判上製四二〇頁　定價參圓五拾錢　送料廿貳錢

新刊

本書は會計學は企業經營に關する學問の領域に屬する知識を問題にするものとして、之を三編に分類し、第一編總論に於て會計學の發生論的研究と研究對象の組織立てとを試み、第二編財務表論に於て、從來會計學の主要部分を占めてゐた貸借對照表と損益計算書の解說を與へ、最後に第三編財産評價論に於ては貸借對照表の眞髓である評價問題を本題とし、如何なる基礎を以て其の價格を掲ぐべきかを論じ飛してゐる。

學術論文の書き方

大阪商大助教授　五島　茂著
四六判上製　定價一圓（内税十錢）　二一五頁　送料十錢

大好評

學術論文の書き方にはコツがある。殊に經濟法律其他の社會科學關係のものはさうだ。誰でもその難かしさを痛感し、そのコツを知りたがつてゐる。が教授も先輩も敢て洩す事をしない。本書はそのコツを眞隨より解明し、高等專門學校大學の學生諸君並に一般研究者の眞の要望に應へたものだ。文章表現技術、基礎研究から學術研究論文の製作方法を詳述し在來の學術論文に缺け一ゐた新しい藝術的呼吸の吹き込みを希求して學術論文の藝術的仕上げの必要と方法を强調した。研究論文執筆に際してまさに必備不可缺の指導書である。

東京神田區神保町一ノ一十一　甲文堂
大阪市淀川區柴島二ノ二〇二
振替大阪二六八〇